

令和6年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2025

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター







## 目 次

I. 令和6年度事業概要	1
調査の理由と工程	2
令和6年度調査遺跡位置図	4
II. 遺跡調査の概要	7
稲沢市	8
一色天神遺跡(本発掘調査B)	8
辻惣山遺跡(本発掘調査B)	10
清須市	11
清洲城下町遺跡(本発掘調査B)	11
清洲城下町遺跡(本発掘調査B)	12
名古屋市	15
西二葉町遺跡(本発掘調査B)	15
豊山町	24
青山神明遺跡・多気中町東遺跡(本発掘調査B)	24
青山神明遺跡(本発掘調査B)	30
青山神明遺跡(本発掘調査B)	32
青山神明遺跡(本発掘調査B)	35
青山神明遺跡・青山金剛遺跡(本発掘調査B)	38
安城市	42
寄島遺跡(本発掘調査B)	42
姫下遺跡(本発掘調査B)	43
中狭間遺跡(本発掘調査B)	44
豊橋市	45
野添遺跡・萱野遺跡(本発掘調査B)	45
設楽町	48
中村遺跡(本発掘調査A)	48
上戸神遺跡(本発掘調査A)	49
ハラビ平遺跡(本発掘調査A・B)	50
III. 刊行報告書抄録	53
第227集 大畑遺跡	54
第228集 大崎遺跡	56
第229集 内貝津橋遺跡	58
第230集 吉田城址・飽海遺跡	60
IV. 普及・公開活動の記録	63
埋蔵文化財展(春の埋蔵文化財展示・秋の埋蔵文化財展)	64
あいち朝日遺跡ミュージアム企画展	66
あいち朝日遺跡ミュージアム 体験! 弥生ムラへの出展/ 愛知県生涯学習推進センター協力講座	68
連続歴史講座	69
栄中日文化センター協力講座	70
清須市文化財講座(協力事業)	71
考古学フェア あいちの考古学2024	72
サポーターズクラブの活動について	75
V. 埋蔵文化財センターの活動	77
資料の貸出一覧	78
ホームページ/ 地元説明会/ 報告書作成のための指導	79
発掘調査における遺構・遺物などの指導	80
令和6年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧	81



## I. 令和6年度事業概要

## 調査の理由と工程

### 1. 発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査期間	調査担当	
国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	中村遺跡	22	令和6年7月	堀木・田中	
			上戸神遺跡	132	令和6年7月	堀木・田中	
			ハラビ平遺跡	857	令和6年11月～ 令和7年1月	堀木・河嶋	
県建設局	道路建設課	橋梁整備工事・総合治水対策特定河川工事（防災安全・緊急対策）（主）名古屋祖父江線 清洲橋 名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事（側道工事あり）	清洲城下町遺跡 （清洲橋）	300	令和6年4月	堀木・田中	
			清洲城下町遺跡 （名鉄）	260	令和7年 1月～3月	永井宏・田中	
			青山神明遺跡 多気中町東遺跡	4,295	令和6年 5月～12月	永井宏・池本・ 蔭山・梶田	
			野添遺跡 萱野遺跡	1,228	令和6年 10月～12月	堀木・田中	
	河川課	中小河川改良事業・総合治水対策特定河川事業（一級河川大山川） 中小河川改良工事（一級河川鹿乗川）	青山神明遺跡 （大山川）	7,000	令和6年 5月～9月	永井宏・鈴木 恵・梶田	
			寄島遺跡	618	令和6年 7月～10月	堀木・河嶋	
			姫下遺跡 中狭間遺跡	187 56	令和6年10月 令和6年10月	堀木・河嶋 堀木・河嶋	
	県防災安全局	防災危機管理課	愛知県基幹的広域防災拠点整備事業	青山神明遺跡 （防災拠点A調整池等）	5,047	令和6年 4月～7月	鈴木正・酒井・ 梶田
				青山神明遺跡 （防災拠点B消防学校）	3,310	令和6年12月～ 令和7年2月	鈴木正・酒井・ 梶田
				青山神明遺跡 青山金剛遺跡 （防災拠点C代替地）	2,642	令和6年 9月～12月	鈴木正・酒井
県教育委員会	財務施設課	明和高等学校校舎建築工事	西二葉町遺跡	2,470	令和6年 5月～11月	堀木・川添	
		いなざわ特別支援学校校舎建築工事	一色天神遺跡	1,100	令和6年 9月～12月	木川・木村・ 武部	
		稲沢緑風館高等学校校舎建築工事	辻惣山遺跡	1,120	令和6年11月～ 令和7年2月	木村・木川・ 武部・永井宏	

令和6年度の調査総面積は 30,644 ㎡

## 2. 整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査年度
整理	国土交通省 中部地方 整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	下延坂遺跡	14,630	R2・R3・ R4・R5
		県スポーツ局 愛知国際 アリーナ課	愛知県新体育館整備・運営等 事業	名城公園遺跡	27,000	R3・R4
整理・報告	国土交通省 中部地方 整備局	営繕部計画課	名古屋第4地方合同庁舎整備 等事業	名古屋城三の丸遺跡(A)	1,119	R5
				名古屋城三の丸遺跡(B)	3,344	R5
	豊橋河川事務所	矢作川河川改修事業	牛寺遺跡	3,800	H30・R3	
	県建設局	上下水道課	日光川上流域下水道事業水 処理施設築造工事	一色青海遺跡	4,560	H30・R1・ R3・R5
道路建設課		一般国道151号(一宮バイパス)	花の木古墳群・花の木 遺跡・花の木北遺跡	8,955	R2・R3・ R4・R5	
印刷・刊行	国土交通省 中部地方 整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	大畑遺跡	16,030	H29・R4
				大崎遺跡	11,085	R3・R4
印刷・刊行	県建設局	道路建設課	道路改築工事 国道420号	内貝津橋遺跡	920	R4
整理・報告・ 印刷・刊行	県防災安全局	防災危機管理課	東三河建設事務所改修工事 (発電機棟等建設)	吉田城址・鮑海遺跡	100	R4

## 3. 令和6年度刊行物

・埋蔵文化財調査報告書(計4冊)

第227集 大畑遺跡

第228集 大崎遺跡

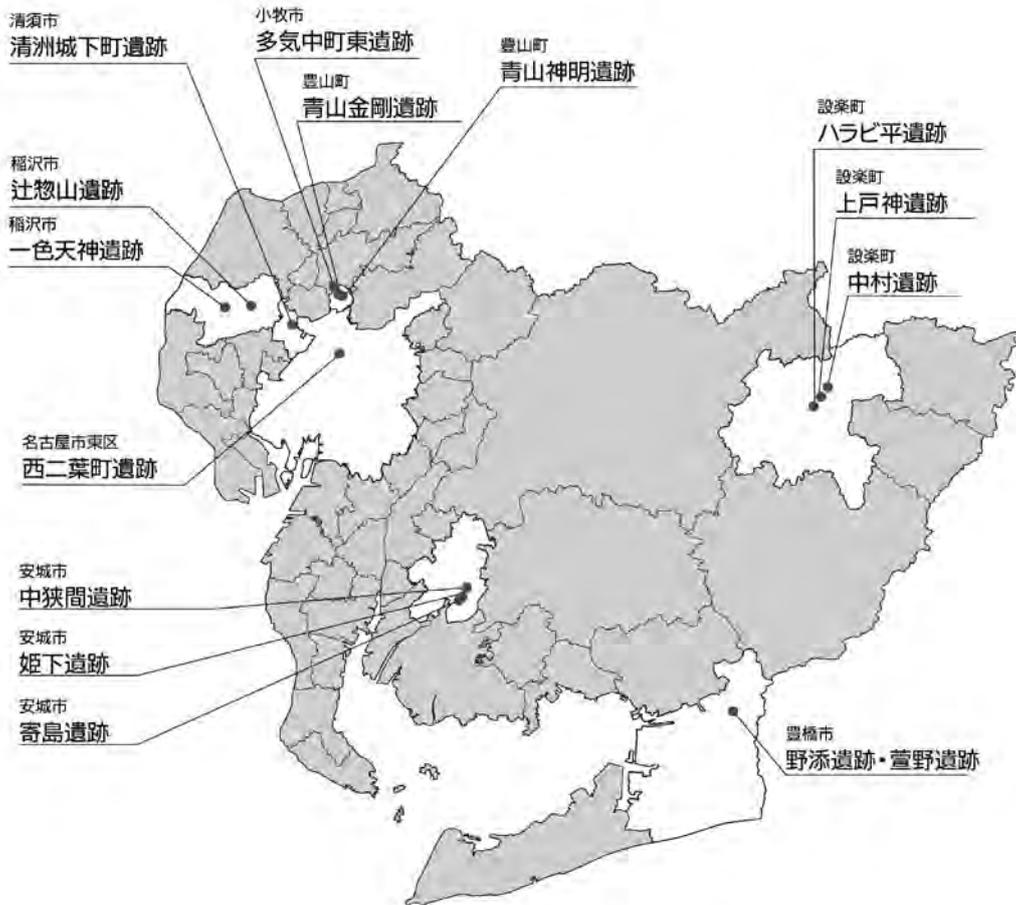
第229集 内貝津橋遺跡

第230集 吉田城址・鮑海遺跡

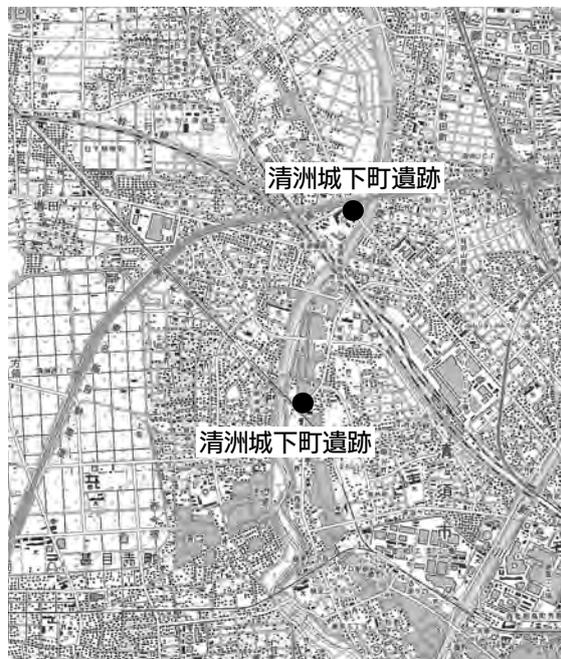
・令和6年度 愛知県埋蔵文化財センター年報

・研究紀要 第25号

### 令和6年度 調査遺跡位置図



国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」

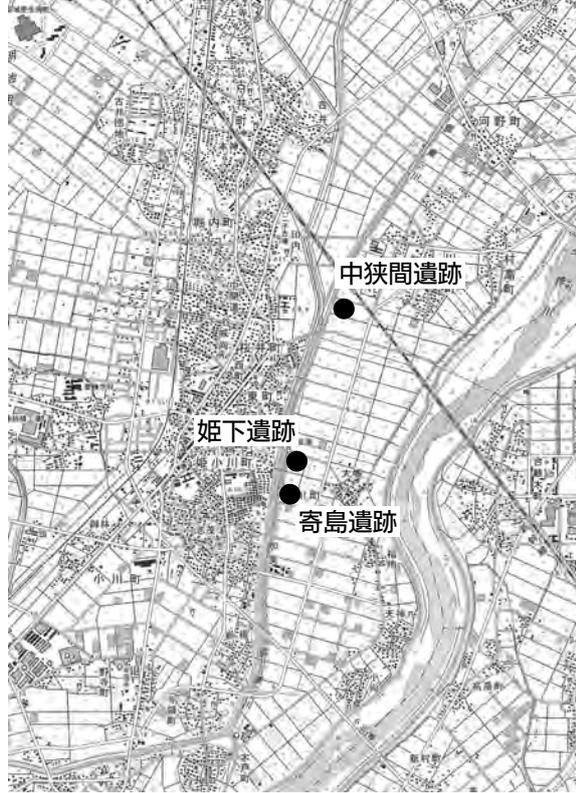


国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」

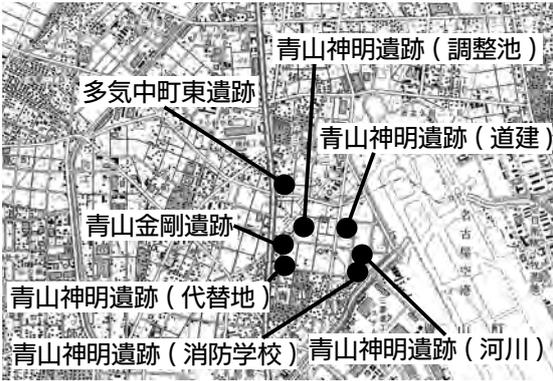
※地形図は50%縮小しています。



国土地理院 1/2.5 万地形図「名古屋北部」



国土地理院 1/2.5 万地形図「安城」



国土地理院 1/2.5 万地形図「小牧」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」



国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」

※地形図は 50%縮小しています。



## II. 遺跡調査の概要

いっしきてんじん  
一色天神遺跡(本発掘調査B)

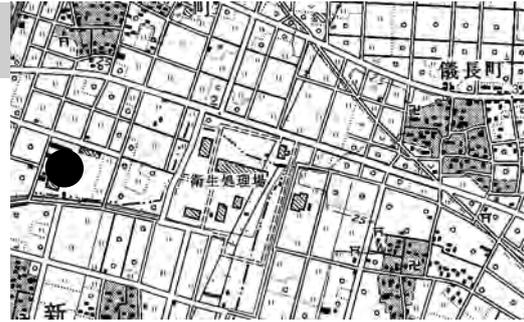
**所在地** 稲沢市一色森山町225-1  
(北緯35度14分05秒 東経136度44分54秒)

**調査理由** いなざわ特別支援学校校舎建築工事

**調査期間** 令和6年9月～12月

**調査面積** 1,100㎡

**担当者** 木川正夫・木村有作・武部真木



調査地点(1/2.5万「清洲」)

**調査の経過** 調査は、愛知県教育委員会財務施設課によるいなざわ特別支援学校校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査期間は令和6年9月から12月、調査面積は1,100㎡である。調査では校舎建築予定地を24A区と設定し、Aa区(西半部)とAb区(東半部)に分割して行い、駐輪場新設予定地は24Aa区の南西突出部、受水槽新設予定地は24B区として調査を実施した。

**立地と環境** 遺跡は尾張平野の中央部、三宅川と日光川に挟まれた沖積低地に位置し、周辺地形は網状に広がる旧流路によって形成された島状の微高地と後背湿地で構成される。また伊勢湾第二浜堤の微高地の一面にあたる。この伊勢湾第二浜堤上に立地する弥生時代の集落遺跡は、東から順に野口・北出遺跡(前期～中期)、一色青海遺跡(中期)、跡ノ口遺跡(中期～後期)、一色天神遺跡(後期～古墳時代初頭)がある。

**調査の概要** 24Ab区東端付近は調査区外に広がるように湿地状の堆積が認められた。それより西側の微高地では弥生土器を含む黒色土包含層の堆積が認められ、黒色土を埋土とする溝が東西方向、南北方向の溝群として確認された。24Ab区東端部では耕作に伴うとみられる複数の溝が並び、付近ではS字状口縁台付甕や高坏が出土した。このほか24Aa区の土坑より人面の可能性が考えられる刻線文のある弥生土器片1点が出土している。

**中世** この黒色土層より上には河川氾濫による砂質土が厚く堆積し、検出された遺構は中世の竪穴状遺構・掘立柱建物柱穴・溝・土坑・道路状遺構がある。竪穴状遺構としたものは平面形が隅丸方形を呈した建物柱穴が確認できないもので、24A区で3棟、24B区で1棟が見つかっている。いくつかの遺構床面では鉄滓が出土したほか、鉄製品、砥石や24Aa区134SKでは加えて焼土と焼石を検出し、鍛冶関連の作業が行われていたと推定される。また、竪穴状遺構は複数が重複しており、出土した山茶碗などから14世紀後半から15世紀初頭にかけて作業場として断続的に利用されていたと考えられる。これらの廃絶後には墓域となった時期があり、銅銭(北宋銭)数枚と山茶碗を伴う土壇墓2基が検出されている。

24Ab区では昭和50年代まで使われていた南北方向の大畦畔があり、下層の西側では並行して中世の溝が2条、大畦畔の直下では地盤改良を目的とした道路地業である波板状凹凸面が検出された。少なくとも中世以降にこの辺りが低地部との境界として意識されてきた可能性が考えられる。

**まとめ** 調査範囲は東側に傾斜する微高地の周縁部にあたり、近接する集落遺跡よりは少し遅れて弥生時代後期以降に集落が成立したと考えられる。また、14世紀後半を中心とした室町時代には、鍛冶関連の作業場として利用された。一帯で河川流路が比較的安定していた時期の微高地縁辺の土地利用状況がうかがわれる。(木川正夫・武部真木)



24B区の竪穴状遺構009SI(西から)



24Aa区134SI床面焼土、焼石検出状況(北から)



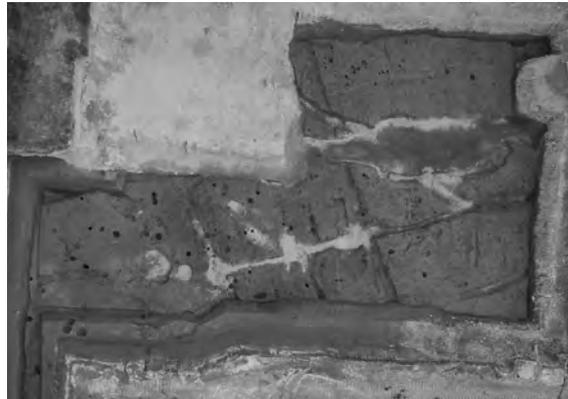
24Aa区道状遺構198SXの残存状況(北から)



24Aa区上面全景(写真上が北)



24Aa区基盤直上 溝446SD検出状況(東から)



24Aa区下面完掘状況(写真上が北)



24Ab区波板状凹凸面を伴う道路状遺構(北から)



24Ab区完掘状況(写真上が南)

つじそうやま  
辻惣山遺跡(本発掘調査B)

**所在地** 稲沢市平野町地内  
(北緯35度14分26秒 東経136度47分14秒)

**調査理由** 稲沢緑風館高等学校校舎建築工事

**調査期間** 令和6年11月～令和7年2月

**調査面積** 1,120㎡

**担当者** 木村有作・木川正夫・武部真木・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「清洲」)

**調査の経過** 調査は、愛知県教育委員会財務施設課による稲沢緑風館高等学校校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年11月から令和7年2月に実施した。調査面積は1,120㎡である。

**立地と環境** 遺跡は稲沢市内の中央に流れる三宅川が大きく蛇行する右岸の自然堤防上に立地する。標高は現況6.5m前後である。

**調査の概要** 24A区は東西方向に長い調査区で、主な遺構としては調査区西側に南北方向の中世の溝037SDとこの溝から東へ10mほど離れて方形土坑を3基確認した。調査区西側には古代の竪穴建物020SI・023SIを2棟確認した。24B区は24A区中央北側に位置する調査区で、東西方向の古代と中世の溝などを確認した。出土遺物は、弥生時代中期後半の土器片、8世紀後半を中心とする須恵器・土師器・瓦など、12世紀末から13世紀初頭を中心とする山茶碗・小皿などがある。(永井宏幸)



24Ab・B区全景(西から)



24Aa区中世溝037SD(南から)



24Aa区古代竪穴建物020SI・023SI(東から)



24B区全景(東から)

きよすじょうかまち  
清洲城下町遺跡 (本発掘調査B)

**所在地** 清須市清洲地内  
(北緯35度12分59秒 東経136度50分10秒)

**調査理由** 名鉄新清洲駅付近鉄道高架化事業の本線工事・  
仮線工事(側道工事あり)

**調査期間** 令和7年1月～3月

**調査面積** 260㎡

**担当者** 永井宏幸・田中 良



調査地点(1/2.5万「清洲」)

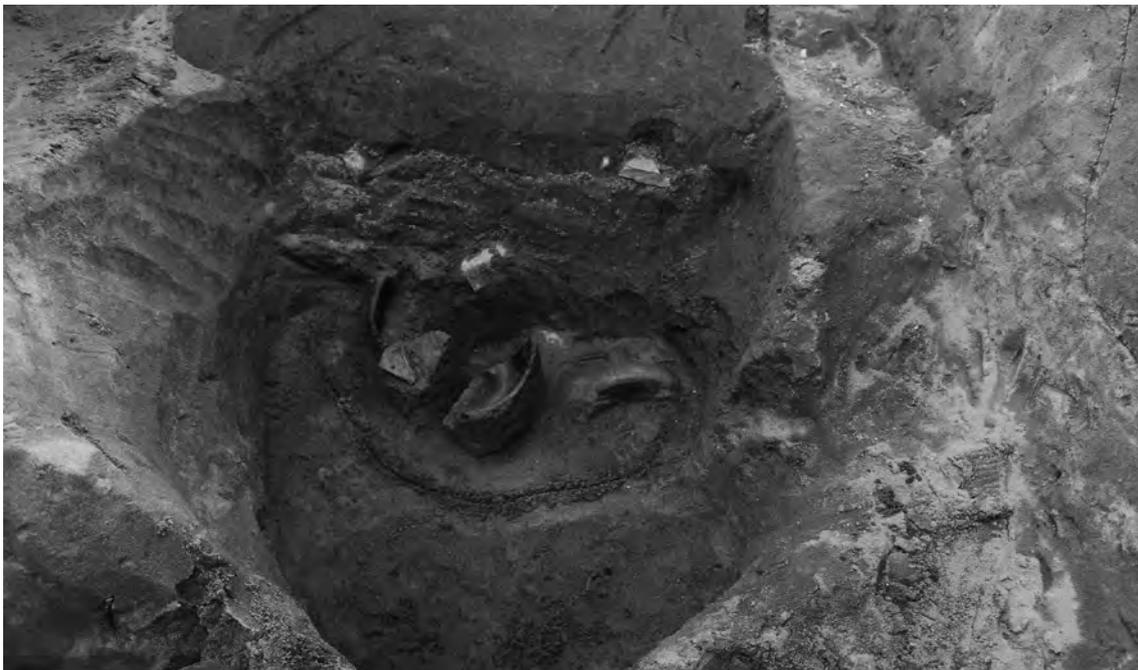
**調査の経過** 調査は、愛知県建設局道路建設課尾張建設事務所による名鉄新清洲駅付近鉄道高架化事業の本線工事・仮線工事(側道工事あり)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査面積は260㎡の2面調査である。

**立地と環境** 清洲城下町遺跡は清須市中央部を流れる五条川兩岸の自然堤防状の微高地とその後背湿地に広がる遺跡である。今回の調査区は県道127号(清須新川線)を挟んで西側を24A区、東側を24B区として設定した。

**調査の概要** 調査は県道127号を挟んだ東側の24B区から開始した。24B区の東端では、江戸時代中期の井戸16SEが検出され、西端では区画溝や礎石を伴う柱穴などが確認された。井戸16SEは、上層で廃絶時に投げ込まれたと考えられる播鉢や鉢などの陶器類が出土し、下層では木質の板材や拳大の円礫が検出された。また、井戸の底面付近では井戸側が残存していた。

これらの遺構は、美濃路が整備された宿場町期の遺構と考えられ、街道沿いに展開した町屋に関連する遺構と考えられる。24A区でも、同様の町屋に関連する遺構が展開すると思われる。

(田中 良)



井戸16SE 遺物出土状況(東から)

ぎよすじょうかまち  
清洲城下町遺跡(本発掘調査B)

所在地 清須市市場地内

(北緯35度13分8秒 東経136度50分38秒)

調査理由 橋梁整備工事・総合治水対策特定河川工事(防災安全・緊急対策)(主)名古屋祖父江線 清洲橋

調査期間 令和6年4月

調査面積 300m<sup>2</sup>

担当者 堀木真美子・田中 良



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

**調査の経過** 調査は、愛知県建設局道路建設課尾張建設事務所による橋梁整備工事・総合治水対策特定河川工事(防災安全・緊急対応)(主)名古屋祖父江線清洲橋に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査区は2000年度の調査区00B区の北側にあたり、昨年度は23C区として石垣よりも上層(1面目・2面目)までを調査した。今年度は追加調査として、石垣部分を3面目として調査した(24区)。

**立地と環境** 清洲城下町遺跡は清須市中央部を流れる五条川兩岸の自然堤防状の微高地とその後背湿地に広がる遺跡である。今回の調査区(24区)は「後期清須城」を描いた古城絵図にある中枢部の北端に位置する。

**調査の概要** 今回の調査では、江戸時代前期の廃棄土坑や溝、遺物を含む整地層が検出され、その下層からは「後期清須城」の石垣と考えられる巨石列020SWが検出された。また、上層の瓦溜まり005SXと巨石列020SWから出土した瓦は、製作技法や規格など異なる要素が確認された。瓦溜まりが整地層を掘り込んで形成されるのに対し、巨石列020SWは整地層が形成されるよりも前に壊された痕跡が確認できるため、巨石列020SWの存続時期と瓦葺き建物(005SX)の存続時期が異なる可能性が想定される。この差については、城主の違いを表している可能性があるため、今後出土遺物の検討によってより明らかになると考えられる。

**瓦溜まり 005SX** 瓦溜まり 005SX は、大量の瓦と少量の陶器が出土する廃棄土坑である。この土坑は、整地層を掘り込んで形成されており、その埋土中から出土した瓦は、後述する巨石列020SWに伴う瓦と異なる要素が確認されている。瓦溜まりや整地層は、「後期清須城」の廃城(清須越し)に関連するものと考えられ、瓦溜まりからは、瓦葺き建物(櫓状建物など)の存在が想定される。

**巨石列 020SW** 巨石列 020SW は、瓦溜まり 005SX などが形成される整地層よりも下層から検出された。この巨石列 020SW は、00B 区から続く部分の北東に位置する。巨石列の基底部には、栗石が敷き詰められており、それらは、巨石が検出された位置よりも北側に伸びることが分かったが、北側はコンクリートによる護岸がなされており、残存していない。この巨石列 020SW は隣接する 00B 区から出土した木簡に、「ほしの新右衛門」の記載があり、この人物が織田信雄分限帳に記載された人物の可能性が高いことから、この巨石列の造成時期は「後期清須城」の織田信雄が城主だった時期(1586年～1590年)と考えられている。

(田中 良)



遺構全体図 (S=1/200)



調査区全景 (西から)



005SX 遺物出土状況 (東から)



005SX 遺物出土状況 (北西から)



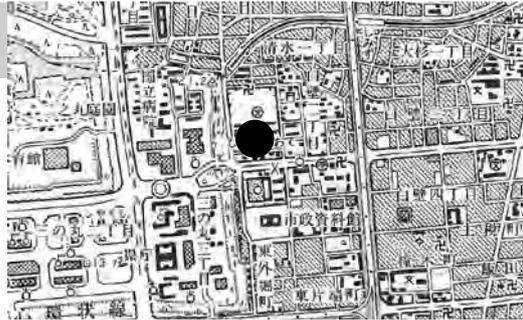
020SW 巨石列検出状況 (北から)



020SW 巨石列基底部検出状況 (北西から)

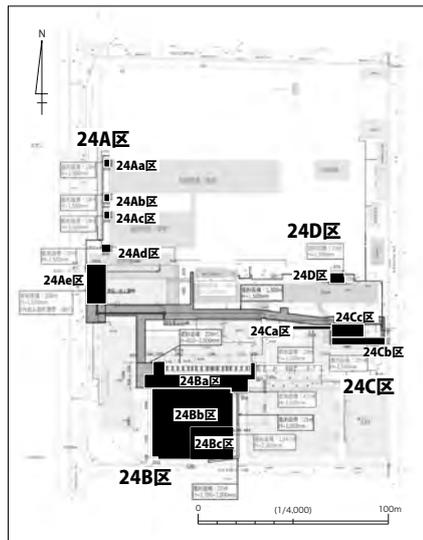
にしふたばちょう  
西二葉町遺跡 (本発掘調査B)

所在地 名古屋市東区白壁 2丁目32番6号  
(北緯35度18分34秒 東経136度90分95秒)  
調査理由 明和高等学校校舎建築工事  
調査期間 令和6年5月～11月  
調査面積 2,470㎡  
担当者 堀木真美子・川添 和暁



調査地点 (1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は、愛知県教育委員会財務施設課による校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年5月から11月にかけて実施した。調査面積は計2,470㎡で、学校敷地内の北東エリアを24A区、南西エリアを24B区、東エリアを24C区、北東エリアを24D区とし、調査の都合上、24A区はa～eの5区に、24B区はa～cの3区に、24C区はa～cの3区に、さらに区分けして実施した。



西二葉町遺跡 調査区位置図

立地と環境 西二葉町遺跡は、名古屋市東区白壁に位置する遺跡で、その範囲は、県立明和高等学校敷地から北東に鎮座する七尾天神社方面に広がる。当地は特別史跡名古屋城跡および名古屋城三の丸遺跡の東に位置しており、現地表の標高は15.5m、名古屋台地が北側に向かって傾斜する崖ぎわ付近に立地している。『新修 名古屋市史 資料編 考古2』(平成25年刊行)によると、西二葉町遺跡は吉田富夫によって「古墳時代聚落址」とした二葉町遺跡

令和6年度 西二葉町遺跡 調査区別概要一覧

区面積	24Aa	24Ab	24Ac	24Ad	24Ae	24Ba	24Bb	24Bc	24C	24D
時代	10 m <sup>2</sup>	10 m <sup>2</sup>	10 m <sup>2</sup>	10 m <sup>2</sup>	250 m <sup>2</sup>	1,957 m <sup>2</sup>			240 m <sup>2</sup>	33 m <sup>2</sup>
戦後	グラウンド客土				愛知県立明和高等学校校舎基礎跡 (日本館など) 愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、					小道の造成
近代	整地層				瓦溜まり、整地層	名古屋帝国大学学生食堂舎基礎 (ほか 愛知県第一中学校校舎跡 (柱跡、地下構造物)			愛知県第一中学校校舎基礎	
近世後半	柱穴、溝	柱穴、溝	整地層、常滑焼埋設遺構	柱穴、溝、井戸、カマド跡、整地層 (貝ブロック)	柱穴、土坑、常滑焼埋設遺構、整地層	柱穴、土坑、井戸、整地層	柱穴、土坑、井戸、常滑焼埋設遺構、道状遺構、整地層	柱穴、土坑、井戸、常滑焼埋設遺構、道状遺構、整地層	柱列、耕作地	井戸？ 解体時堆積土 【家紋入り軒丸瓦、犬山焼陶器など】
近世前半					柱穴、大型土坑 (貝層)、井戸、整地層 【陶器、土師皿、焼塩壺、土人形、銅製品、骨角器、シカ骨などの動物遺存体】	柱穴、大型土坑 (貝層)、地下室、整地層		溝・耕作地		
戦国期					区画溝	区画溝	区画溝	区画溝	土坑 【天目茶碗】	
中世						溝・耕作地	溝・耕作地	溝・耕作地		
古代	活動面 (竪穴建物跡か) 【須恵器・土師器】					【須恵器・土馬】			【灰釉陶器碗】	
古墳						【須恵器】				
備考			地山達せず					地山達せず	24Ca区・24Cb区 地山達せず	

に当たるようである。これとは別に、明和高等学校敷地全体には成瀬隼人正中屋敷が所在していたことが以前から知られていた。

**基本層序**

遺跡の立地する地盤である熱田台地は、遺跡範囲の西側ないしは南側では地表下の浅いレベルでその表面に達し、北側ないしは東側に向かうに従って、緩やかに傾斜している。この熱田台地の傾斜に従って古墳時代・古代以降の活動痕跡が堆積層として形成されているため、遺跡範囲の北側ないしは東側では堆積層の状態が良好に残されている。一方、熱田台地で見えていくと、上位は黄褐色粘土層で下位になるに従って緑色の硬砂層へと変遷していくが、24B区の西側ではより浅いレベルでこの緑色の硬砂層を見ることができた。

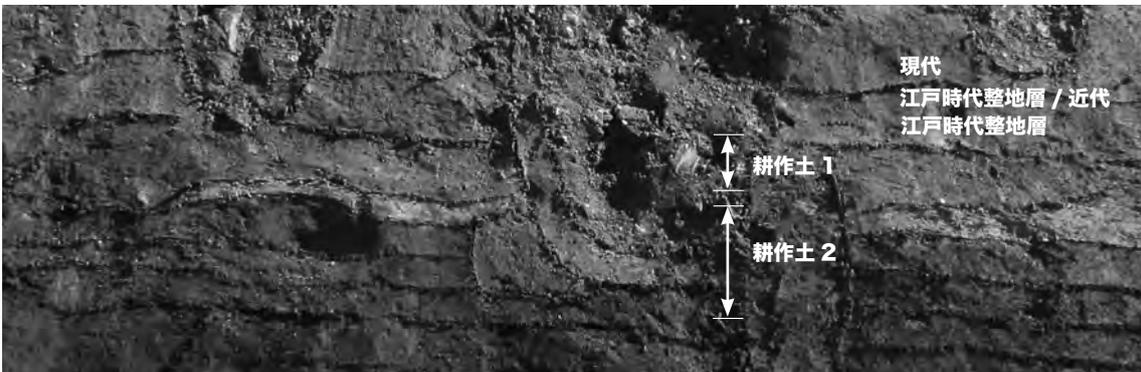
24B区をもとに基本層序を見ていく。近世の屋敷建物本体があったと推定される24Ba区北壁東側でみると、舗装下の碎石(30cm)下から、上からI層：現代堆積層(20cm)、II層：灰褐色硬砂層(10cm)【近代もしくは江戸時代堆積層】、III層：褐色もしくは灰褐色砂層(60cm)【近世整地層】、IV層：灰色～黒色粘土層(20cm)【古墳時代～戦国期の耕作土・遺物包含層】、V層：にぶい黄褐色シルト・粘土層(10cm)【漸移層】、VI層：黄褐色粘土層(熱田台地)【地山】であり、III層では3層の堆積が観察された。一方、屋敷建物外の敷地に当たると推定される24Bc区東壁ではIII層の下層が耕作土の状態を呈していた(写真下の耕作土1がこれに相当)。

**調査の概要**

調査区は遺跡範囲の各所に設定されているため、各調査区で確認された内容は個別に相違がある。全体の傾向は、15頁の下図にまとめておいた。やはり、調査区全体で広く確認できるのは、近世の成瀬隼人正中屋敷関連の遺構で、現在の明和高等学校が立地するような敷地全体が平坦な地形となったのは、明治初期の建物体体後から愛知県立第一中学校が建設されるまでの間と推定される。なお、古墳時代から古代の遺構・遺物が確認されたのは、24Aa区と24Ba区であった。



24Ba 区北壁東部分 土層断面



24Bc 区東壁 土層断面



24Aa 区 1156SX 【活動面：古代】（南より）



24Aa 区 1156SX 遺物出土状況（西より）



24Ae 区 柱穴群 【屋敷建物跡：近世】（南東より）



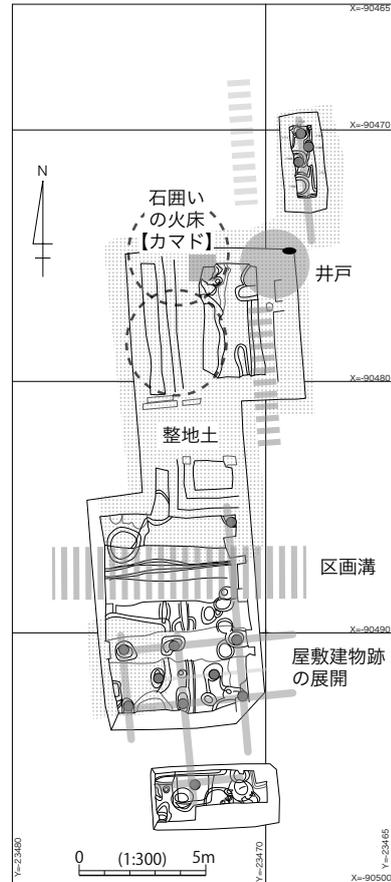
24Ae 区 1125SD 【溝：戦国期～近世初頭】（西より）



24Ae 区 1152SL 【カマド跡：近世】（東より）



24Ae 区 全体 【近世整地層下】（上が東）



24Ad 区・Ae 区全体図

2 4 A 区 北から24Aa区、24Ab区、24Ac区、24Ad区、24Ae区と、5箇所の調査区が離れて設定された。地表からの名古屋台地までの到達までが、24Ae区南端が50cmほどである一方、24Ae区北側では1m60cmほどと、調査区北側に向かうに従い名古屋台地の地形が傾斜している様子が窺える。この低位部分が旧来の遺跡の範囲として知られていたところである。

24Aa区は、最も北側に設定された調査区である。Ⅲ層の下では、近世の柱穴と溝、そしてⅣ層を埋土とする古代の遺構を確認した。遺構は東端しかとらえられておらず特定できないため活動面としているが、平面プランから竪穴建物跡の一部である可能性が考えられる。埋土中位のレベルで古代の土師器・須恵器が水平を保った状態で出土しており、竪穴建物跡であるならば、これが床面レベルになる可能性もある。

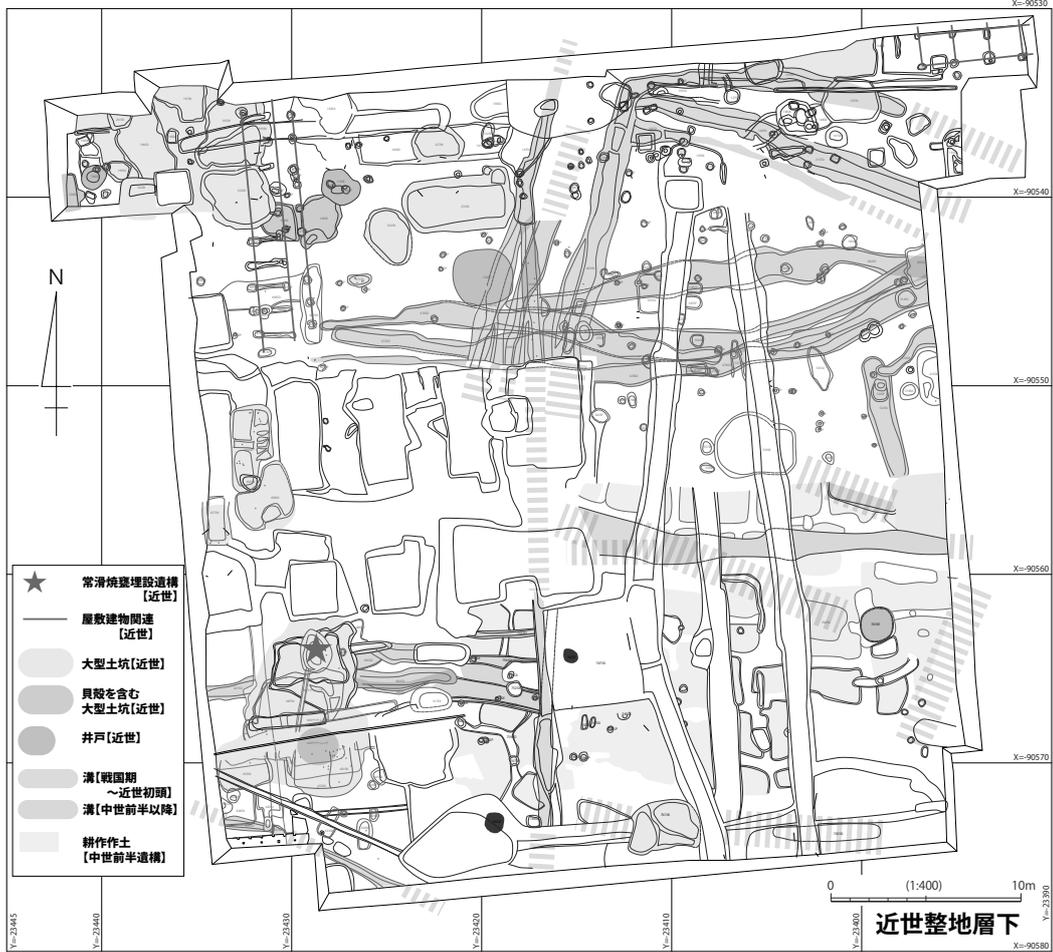
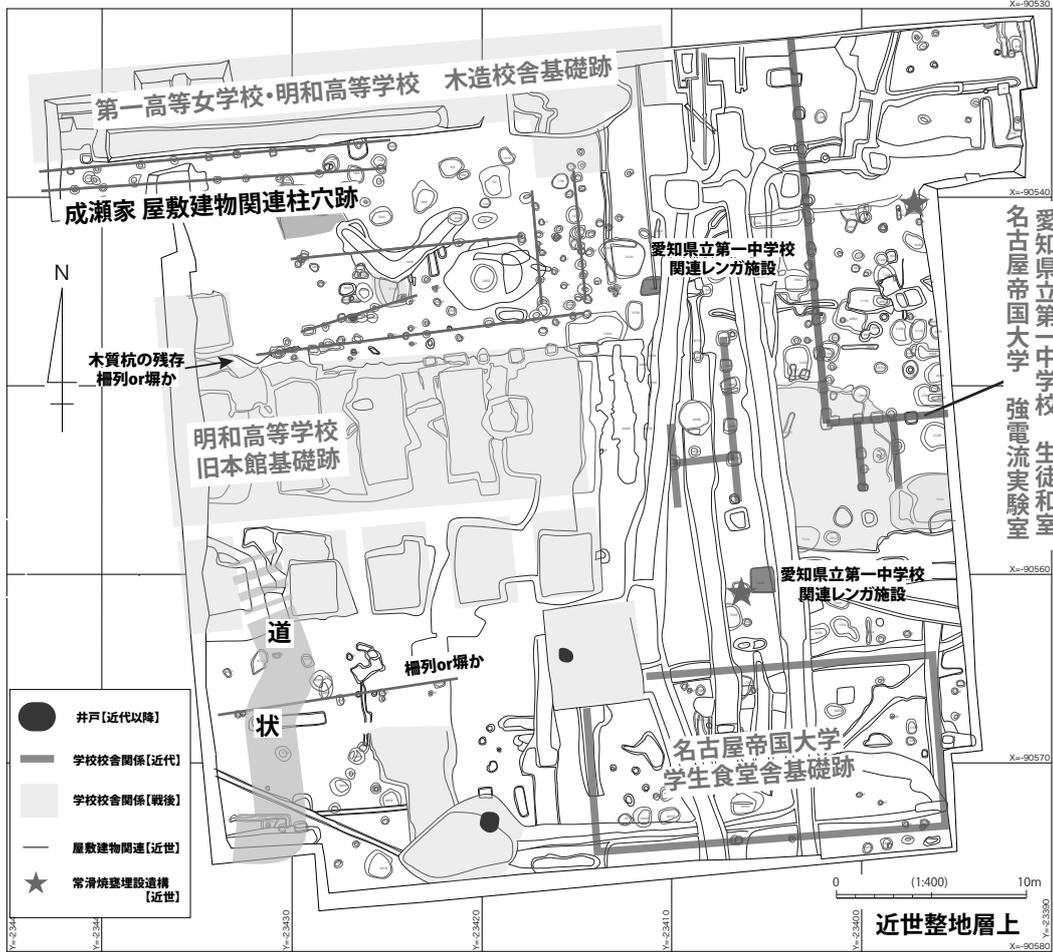
24Ab区では、Ⅲ層の下で、近世の柱穴と溝1条を調査した。柱穴は扁平な濃飛流紋岩河原石による根石(以下、根石とするものはすべてこの形状・石材のものである)を伴うもので屋敷建物関連の柱穴と考えられる。溝は断面形状箱掘りである。柱穴に先行するもので、屋敷建物前に存在していた区画溝の可能性もある。

24Ac区は、調査の制約上、Ⅲ層上面(近世整地層)で調査を終了せざるを得なかった。常滑焼甕の底部が正位の状態で出土した。これが埋設遺構であった可能性も考えられる。

24Ad区では、Ⅲ層の下で柱穴が4基確認された。このうち3基には根石があり、根石が抜かれた柱穴を含めて、直線的な柱列を形成するものもある。これらは屋敷建物に関係するものである。なお、この調査区では、Ⅳ層の形成は顕著ではなかった。

24Ae区は、24A区の中で最も広く設定された調査区である。Ⅰ層下でかつての明和高等学校校舎基礎に加えて、第一高等女学校校舎基礎跡の存在も確認できた。校舎は戦後すぐに立てられた木造校舎基礎である。これらの基礎は、Ⅱ層およびⅢ層の一部を掘りこむ形で埋設あるいは設置されていた。Ⅱ層を除去すると調査区南端のみⅥ層の基盤層である熱田台地に達した。ここで、愛知県立第一中学校校舎に葺かれた瓦が集積している土坑が見ついているほかは、近代の遺構は希薄であった。Ⅵ層に達しなかった範囲ではⅢ層を検出した。調査区南東端では浅い土坑状の掘り方を呈する凹みに整地が行われていた様子が見られた。一方、調査区北側に向かって広くⅢ層が検出された範囲では、最深1mを越える整地層が確認された。整地層は灰褐色の砂層のほか、黒色粘土と熱田台地由来の黄褐色粘土、もしくは緑色の硬砂層との斑土で構成され、部分的にハマグリなどの貝層も検出した。調査区側では、根石をもつ柱穴によって構成される屋敷建物跡が確認されているが、この整地層中でも柱穴を確認することができている。この整地層の堆積している南際では断面箱掘り状の大きな溝が確認された。整地層は先行するこの溝を含めて、低位部分を平坦にするように築き、屋敷建物を構築したものと考えられる。調査区北端では径5m以上の掘り方を呈する遺構が重複して見ついている。これらは焼土・炭化物を多く含むもので、径50cmほどの間隔で対になっている焼けた壁面が激しく重複する状態で見つかった。最下層では、板石を方形状に組んだ火床が見つかり、中から土師器鍋片がまとまって出土した。これらはカマド跡の可能性が考えられる。また、隣接する北東側では井戸の存在も確認されており、この一帯が炊事関係の場であった可能性が高いことが考えられる。

2 4 B 区 最も広い調査区で、上から(1)現代の客土直下【Ⅰ層もしくはⅡ層上面】、(2)江戸時代の整地層上面【Ⅲ層上面】、(3)江戸時代の整地層下面【Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層上面】の、三段階に分けて調査を実施した。



24B区全体図(上:近世整地層上調査遺構、下:近世整地層下調査遺構)



24Ba区全体【近世整地層上】(上が北)



24Bb区全体【近世整地層下】(上が北)



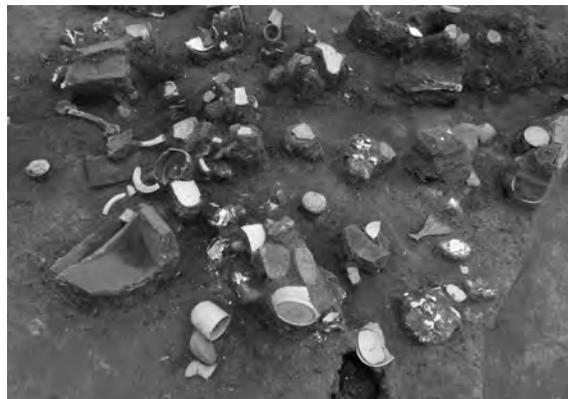
24Bb区 杭の残る柱穴列【近世】(西より)



24Bb区 383SK 焼塩壺【近世】(北より)



24Bb区 060SK 青銅杓子出土状況【近世】(南より)



24Bb区 060SK 遺物出土状況【近世】(南西より)



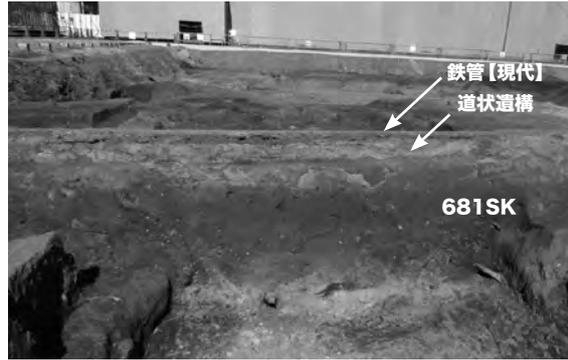
24Ba区 193SK 掘鉢出土状況【近世】(北東より)



24Ba区 658SK 遺物出土状況【近世】(東より)



24Bb区 659SK【地下室：近世】(北西より)



24Bb区 道状遺構(上)、681SK(下) 土層断面(南より)



24Bc区 耕作土検出状況【近世】(北より)



24Bc区 名古屋帝国大学学生食堂舎基礎跡(北より)

(1)の段階では、近代から現代の学校校舎基礎などで、そのまま残存している状態のものを確認した。特筆すべきものに、名古屋帝国大学学生食堂舎の基礎が良好な状態で確認されたことである。

(2)の段階では、愛知一中時代の学校校舎建物跡のほか、江戸時代の成瀬隼人正中屋敷関連遺構【新しい段階】がまとまって調査された。前者には、平面プラン方形の柱穴跡と、一辺1mほどのレンガ積みの地下構造物がある。後者では、根石を有する柱穴列が、特に調査区北西端で良好な状態で確認された。また、根石を有さないものの杭自体が残存していた杭列も確認されている。この場所がこの調査面で確認される成瀬家屋敷建物本体の南端ではないかと推定される。また、調査区南西端では南北に延びる道状を呈する整地層とそれを跨ぐ形での柱列を確認している。屋敷へ通じる門などがあった可能性が考えられる。

(3)の段階は、成瀬隼人正中屋敷関連の遺構群【古い段階】に加え、戦国時代～江戸時代初頭の土地区画溝、さらには鎌倉・室町時代以降に営まれた水田・畑地などの耕作地跡が確認された。中屋敷関連の遺構群には掘立柱構造による屋敷建物跡のほか、大型土坑群とそれに関連する整地層、井戸などがある。大型土坑には掘り方の浅いものと著しく深いものがあり、24Bb区060SK・092SKのように貝層を含むものもあった。060SKからはシカ一<sup>ちか</sup>個体分の四肢骨がとまって出土した。また、24Bb区659SKは階段が備わっていた地下室である。さらに、調査区南西端の道状遺構付近は、もともと大型土坑が埋められた整地土によって造成されており、その中心的土坑である24Bb区681SKは掘り方底面に達することができなかったことから、元来井戸であった可能性も考えられる。

戦国時代～江戸時代初頭の土地区画溝は、成瀬家屋敷関連遺構群とは軸線を異にする区画となって確認された。一辺20～30mに及ぶ方形区画が、北東-南西方向を軸として展開している。この区画に対応する柱穴なども確認はなされているものの、掘立柱建物跡の特

定に至るものは、現在のところ確認できていない。

中世以降の遺物を含む溝が、上記遺構群とはさらに軸線が異なる形で見つかっている。東西方向に展開する溝がやや弧状を描く様子は、旧地形の等高線に沿っていた可能性がある。この溝に沿って、やや不定形な方形の区画を24Bb区南西側と24Bc区で検出した。土壌は攪拌されており、沈鉄を多く含むことから、かつては耕作地景観であったことが想定される。24B区におけるIV層はこのような攪拌された堆積層が主体となっていた。

**24C区** 24C区では、24Cc区のみが面的な調査が可能となった。昭和40年代以降の学校関係の工事のため、II層上面で愛知一中時の学校校舎基礎の跡を部分的に確認した。江戸時代の整地層(盛土:III層)を掘削すると、IV層・V層・VI層に達し、この面で戦国時代以前の建物跡のほか、耕作地(畑地)を確認した。この耕作土中からは灰釉陶器碗が出土したが、耕作地自体は中世前半以降と考えられる。

**24D区** 表土直下で戦後の道の跡があり、その下では、愛知一中時代の学校校舎建物基礎がとても良好な状態で確認された。さらに下には、江戸時代終わり頃の陶器・瓦を含む堆積層が見つかった。堆積層はしまりが緩く、明治初期の中屋敷解体時の廃棄層と想定される。この廃棄層から家紋入りの軒丸瓦と犬山焼小皿が出土した。

**出土遺物** 出土遺物には、古墳時代の須恵器杯身蓋・高杯脚部がある。古代では須恵器・土師器・灰釉陶器のほか、土馬が見つかった。土馬は24Ba区のIII層中からの出土である。中世前半では山茶碗片、戦国期では天目茶碗などの陶器片である。最も遺物が多いのは近世であり、各種陶器や土師器皿が多量に出土した。土師器皿の多くは灯明皿として使用された可能性が高い。焼塩壺も出土しているが、17世紀代が中心である。その他、土人形や、銭・杓子・煙管などの銅製品のほか、ヘアピンと考えられる骨角器も出土した。(川添和暁)



24Cc区 全景【近世整地層下】(南西より)



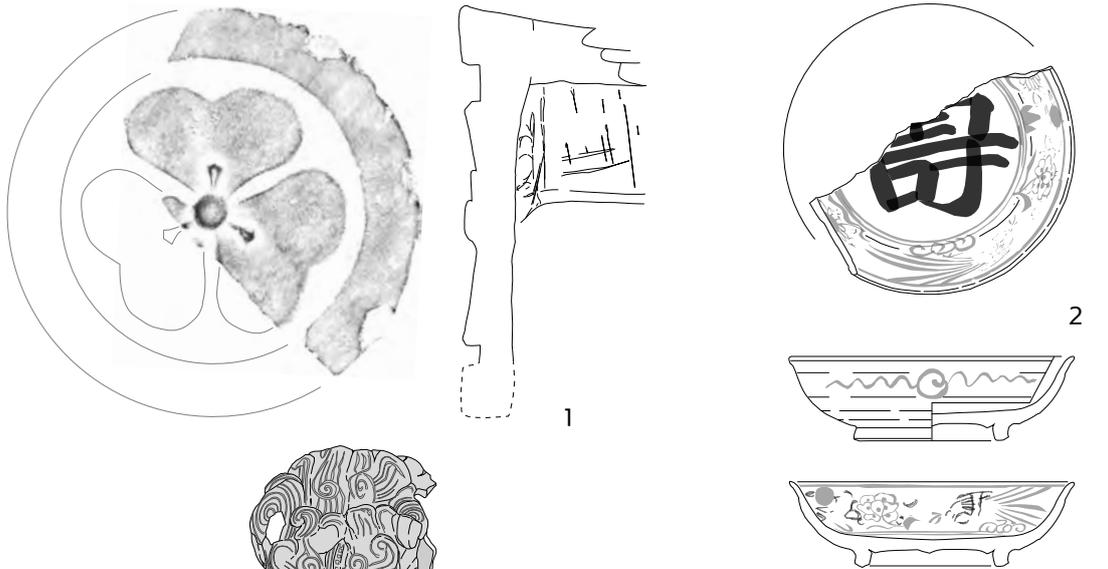
24Cc区 近世耕作土出土遺物【灰釉陶器:古代】



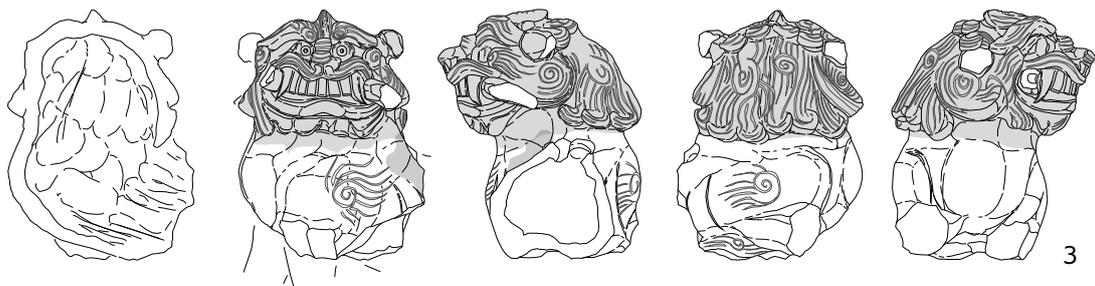
24D区 全景【愛知県第一中学校校舎基礎跡】(北西より)



24D区 堆積層土層断面【近世末~近代初頭】



1・2：24D区出土、3～5：24B区出土



0 (1/3) 10cm

1：家紋入り軒丸瓦、2：犬山焼小皿  
3：陶製狛犬、4：焼塩壺、5：骨製ヘアピン

①～⑦：焼塩壺  
⑧：土馬  
⑨：須恵器高杯



西二葉町遺跡出土遺物(4と④は同一資料)

あおやましんめい たきななまちはがし <b>青山神明遺跡・多気中町東遺跡 (本発掘調査B)</b>		
所在地	西春日井郡豊山町大字青山字神明地内・小牧市多気東町地内 (北緯35度15分46秒 東経136度54分47秒・北緯35度15分53秒 東経136度54分31秒)	
調査理由	道路改良事業(交付金)(一)春日小牧線、(一)小牧岩倉一宮線	
調査期間	令和6年5月～12月	
調査面積	4,295㎡	
担当者	永井宏幸・池本正明・蔭山誠一・梶田真由	

**調査の経過** 調査は、愛知県建設局道路建設課による県道春日小牧線と小牧岩倉一宮線の道路改良事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年5月から12月にかけて実施した。調査面積は4,295㎡で、青山神明遺跡は豊山町道52号線の北、町道に沿って西から24H区～24J区、豊山町道1号線の東、町道に沿って24K区、豊山町道101号線の南、町道に沿って24L区として調査を実施した。

多気中町東遺跡は、国道41号と小牧市道多気東町11号線の多気中町東交差点の北東の地点を調査した。青山神明遺跡については、家屋や用水路、道路などにより、24H区は西から24Ha区と24Hb区に、24I区も西から24Ia区～24Ic区に、24J区も西から24Ja区と24Jb区に、24K区は南から24Ka区と24Kb区に分けて調査した。

**立地と環境** 遺跡は小牧市および春日井市から連なる上部更新統に属する低位段丘上に立地する。青山神明遺跡は段丘の南端にあたり、段丘上を流れる大山川と中江川に挟まれた自然堤防から堤間湿地内にかけて広がる。多気中町東遺跡は同じ段丘上にある中江川の右岸自然堤防の東縁辺部に立地する。調査地の標高は10m～12m前後で、現状は畑地や水田であった。

**調査の概要** 地表面から現在の耕作土を除去して、地下20cm～70cmにて、古墳時代前期から江戸時代後期にかけての遺構と遺物を検出することができた。



令和6年度 青山神明遺跡 多気中町東遺跡調査区位置図

## 青山神明遺跡

古墳時代前期の遺構は24Ka区と24Kb区において竪穴建物23棟、土坑10基、溝1条を確認できた。竪穴建物は一辺2m～6m程の平面が隅丸方形から台形、長方形で、深さ3cm～30cmが残存していた。竪穴建物093SIには、中央付近に炉跡と思われる焼土が検出できた。また、下面にて一辺6m前後の幅広周溝の竪穴建物450SIが確認できた。この住居は幅1m程の溝を床面外側に方形にめぐらし、その内側に4本の支柱穴と礫を置いた炉跡を確認できた。24Kb区の南側には、幅2.0m、深さ1.5mの東西方向の溝313SDがあり、集落の外側を区画する溝と思われる。出土遺物は小さい破片の状態で見つかるものがほとんどであったが、土師器の甕、壺、高杯などが確認できた。

続く古墳時代後期には、24Ka区の南側にて竪穴建物2棟が重なって確認された。竪穴建物は、一辺が2m～3m程の隅丸方形の平面のもので、竪穴建物134SIは深さが約40cmと深いものであった。

奈良時代～平安時代には、24Ha区にて竪穴建物10棟、溝1条、土坑1基が確認できた。竪穴建物の形態は古墳時代のものに似ており、2m～4m程の隅丸方形から台形、長方形の平面のもので、深さは3cm～10cmが残っていた。

平安時代末～戦国時代の遺構は、谷状地形にある24Ia区～24Ic区を除くほぼ全ての地点で確認され、溝17条、掘立柱建物1棟、竪穴状土坑1基、井戸3基、土坑墓1基、溝22条、土坑10基、多数の柱穴を確認した。24Ka区では、東西の比較的大規模な溝の間に掘立柱建物1棟と柱穴となる土坑が多数見つかると、掘立柱建物が連綿と存在したと思われる。

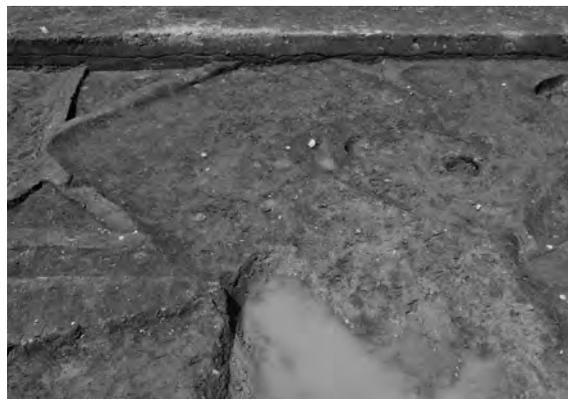
これらの掘立柱建物に隣接して、竪穴状土坑1基、土坑墓1基を確認した。24Ka区西側で検出された竪穴状土坑120SIは、東西3.5m以上、南北3.6mの台形の平面のもので、掘った穴を一度埋めて黄色土で床面を設けていた。床面には焼けた礫や山茶碗が出土した。また、24Ka区南側にある035SKは、長さ2.3m、幅0.75m、深さ35cmの平面隅丸長方形のもので土坑墓の可能性がある。

井戸は24Hb区に1基、24Ja区に1基、24Jb区に2基、24Ka区に1基が確認され、全て素掘りの井戸であった。これらの井戸は、掘立柱建物となる柱穴が分布する範囲より外れてあり、同時期の溝に重複、隣接する地点に確認された。

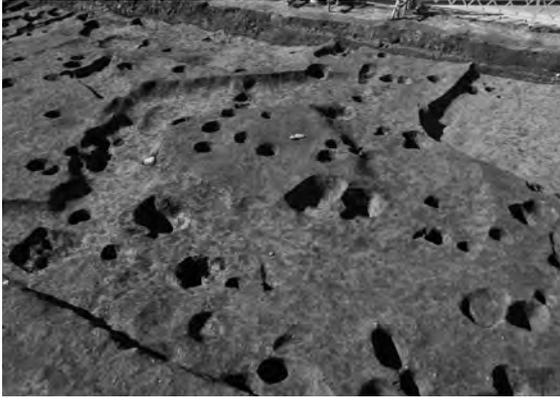
江戸時代後期～近代の遺構には大小の溝が認められ、24Ha区に8条、24Hb区に1条、24Jb区に4条、24Kb区に5条が確認できた。24Ha区で確認された溝は幅0.3m～0.6m程の浅い溝で、畑などの耕作に関係する溝と思われる。その他の調査区で見つかった溝は比較的大規模なもので、水田や畑の耕作に伴う用水路と思われる。



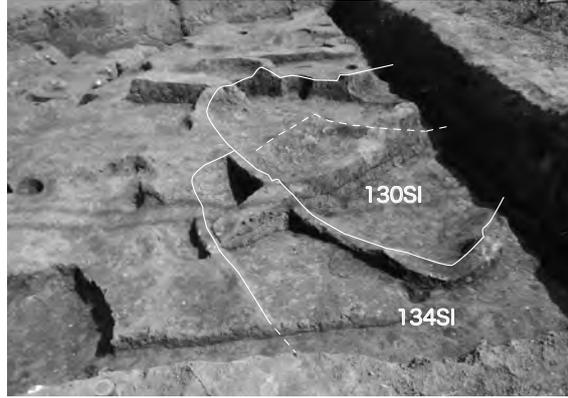
24Ha区全景（北より）



24Ha区 045SI（南より）



24Ka区 450SI (北東より)



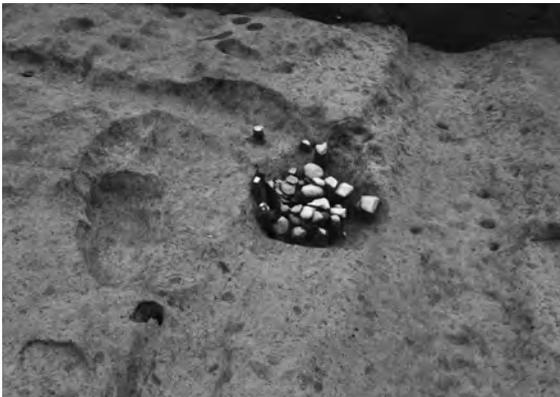
24Ka区 130SI・134SI (西より)



24Ka区 120SI (北より)



24Ka区 023SK 磨製石斧出土状況 (北西より)



24Ka区 520SE 遺物出土状況 (東より)



24Kb区 全景 (東より)



24Kb区 313SD (北東より)



24L区 東部 (北東より)



24Ha 区 034SD・054SD (北西より)



24Hb 区西部全景 (北より)



24Hb 区 118SK 遺物出土状況 (北西より)



24Hb 区 135SE 断面 (西より)



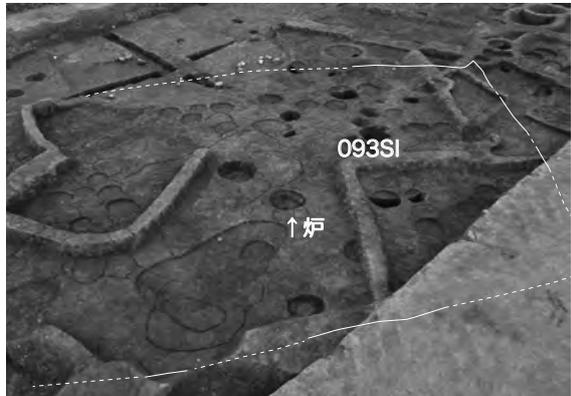
24Ia 区東部全景 (東より)



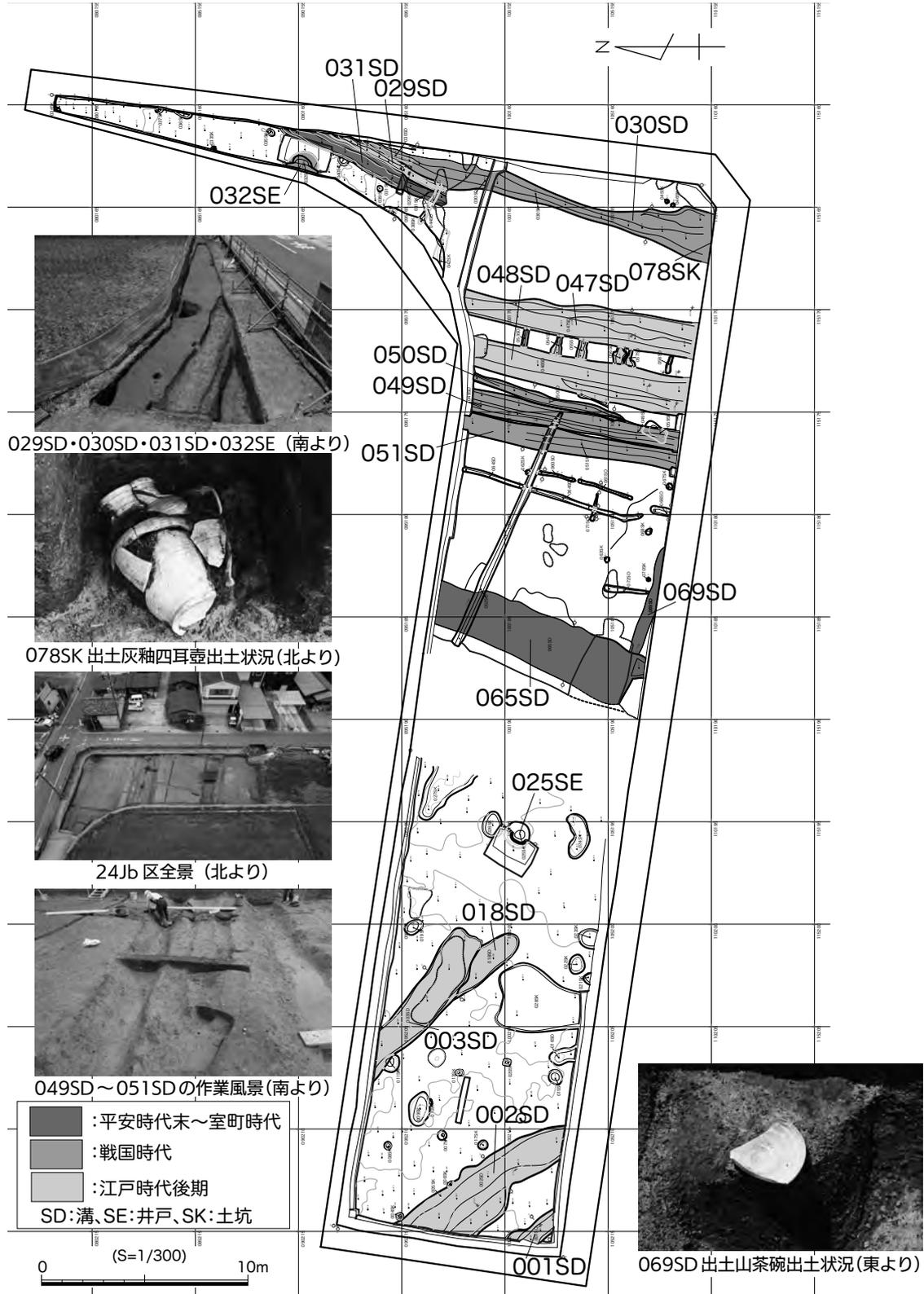
24Ja 区全景 (北より)



24Ka 区南部 2 面全景 (北東より)



24Ka 区 093SI (南東より)

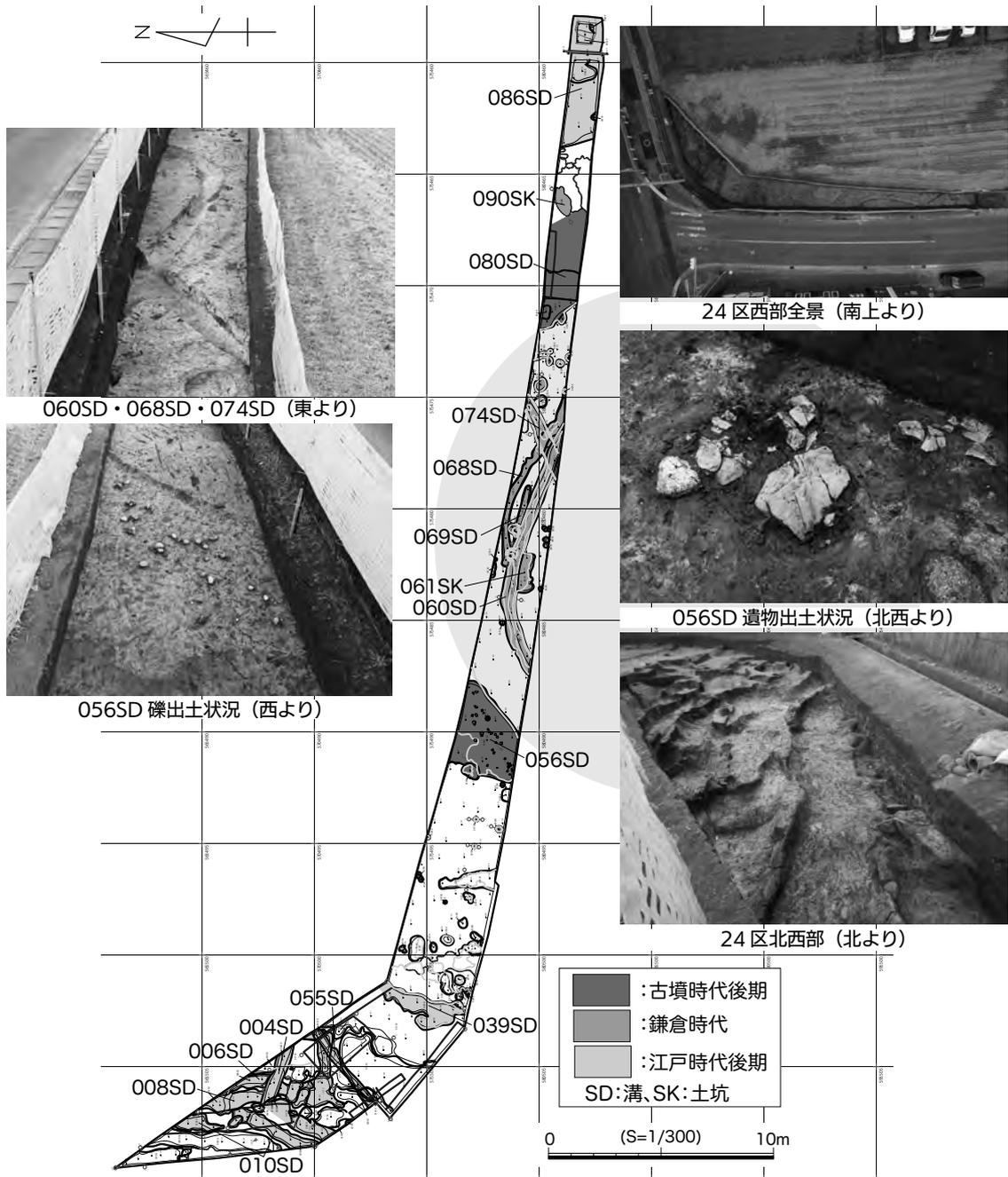


青山神明遺跡 24Jb 区遺構図 (1 : 300)

**多気中町東遺跡** 古墳時代後期の溝2条と鎌倉時代から江戸時代にかけての溝7条を確認できた。古墳時代後期の溝2条からは、6世紀頃の円筒埴輪や須恵器、葺石の可能性のある礫が出土し、径22m前後の円墳の一部にあたるものと思われる。

**ま と め** 今回の調査により古墳時代前期の竪穴建物からなる居住域が青山神明遺跡24Ka区から24Kb区にかけてあり、古墳時代後期には24Ka区の南側に居住域の北端部が、多気中町東遺跡において円墳の存在が確認できた。奈良時代～平安時代には、Ha区において竪穴建物からなる居住域がみつき、平安時代末～戦国時代にはHa区、Hb区西部、Ja区・Jb区・Ka区・L区東部・多気中町東遺跡24区において井戸・土坑・溝など居住域を確認することができた。江戸時代後期には水田や畑など耕作に伴う溝や用水路と思われる溝が確認できた。

(蔭山誠一)



多気中町東遺跡 24区遺構図 (1:300)

あおやましんめい

## 青山神明遺跡(本発掘調査B)

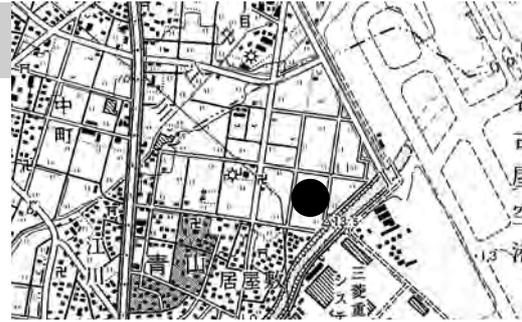
**所在地** 西春日井郡豊山町大字青山字神明地内  
(北緯35度15分38秒 東経136度54分52.18秒)

**調査理由** 中小河川改良事業(一級河川大山川)

**調査期間** 令和6年5月～9月

**調査面積** 7,000㎡

**担当者** 永井宏幸・鈴木恵介・梶田真由



調査地点(1/2.5万「小牧」)

**調査の経過** 調査は、愛知県建設局河川課による大山川調節池の工事に伴う事前調査として、愛知県民文化局より委託を受け、令和6年5月～9月まで実施した。調査区は令和5年度の23C区に隣接する場所である。調査面積は、7000㎡でA区2800㎡、B区4200㎡に分けて調査を行った。

**立地と環境** 青山神明遺跡は西春日井郡豊山町青山神明地内に位置しており、小牧市から続く低位段丘上に立地する。本遺跡の南東側には大山川、南西側には中江川があり、挟まれている。標高は約10mである。

**調査の概要** A区は、主に中世の土坑、井戸、近世から近代までの溝が見つかった。土坑(10162SK)は、約50cmの小型の円形土坑で上部から尾張型山茶碗が見つかった。井戸は6基見つかり、その中でも10395SEは深さが1.5mあり、下層で尾張型山茶碗が完形で1点出土している。また、10380SEでは、埋土から尾張型山茶碗が4点出土したが口縁や胴部分が欠損していた。

近世から近代までの溝は、昨年度の23C区で確認されていた近世の溝6条と近代の道路跡の延長部が確認された。近代の道路は調査区の中央付近で南西方向に曲がるのが明らかとなった。

**B区** B区は、主に湿地状の堆積と弥生時代の土坑を確認した。湿地状の堆積は4層に分かれる黒色土で、調査区の中央付近から南側にかけて確認された。1層目は土師器甕や須恵器有台杯などが出土したが、最下層からは山茶碗が出土したため、中世以降に堆積したと考えられる。

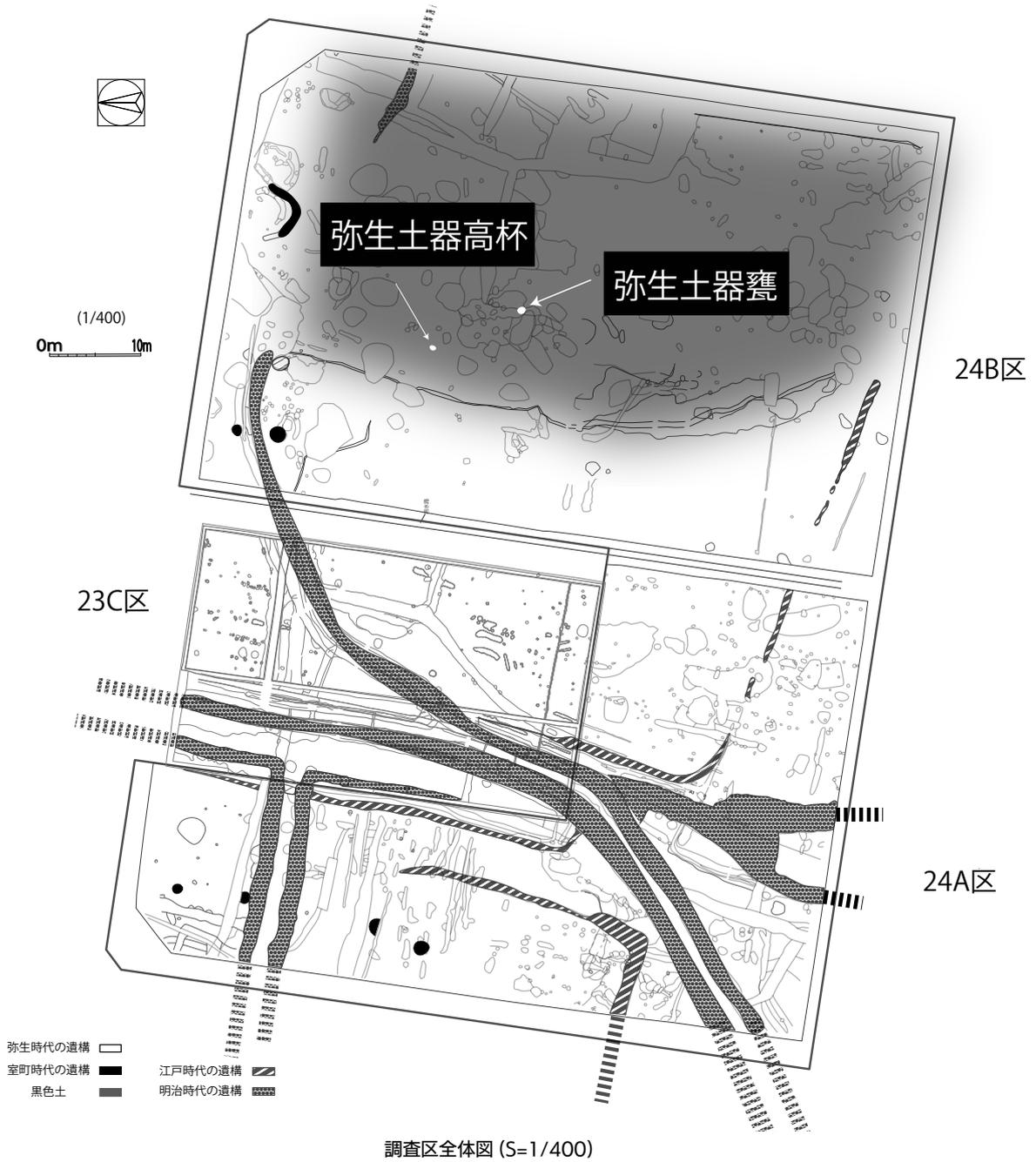
弥生時代の土坑は、B区北側付近で2基確認されている。00200SKは、小型の円形土坑で深さは0.3mと浅い。遺物は弥生時代前期の遠賀川式土器甕の口縁部が出土した。これまでの青山神明遺跡全体の中で、一番古い遺物である。

00200SKの北側10mの地点で検出された00119SKは、00200SKと同規模で、弥生土器高杯が出土した。しかし、口縁部が欠損しており、詳しい時期は明らかでない。

B区南側では、近世頃の結桶が見つかった。板は20枚でたがも確認されている。地面の削平の影響で約60cmしか残っていない。

**まとめ** 以上のことから、青山神明遺跡24A・B区は、湿地状の堆積周辺に中世から近世、近代にかけての集落跡が営まれていたと考えられる。

(鈴木恵介・梶田真由)



井戸 10380SE 遺物の出土状況



B区調査風景

あおやましんめい

青山神明遺跡(本発掘調査B)

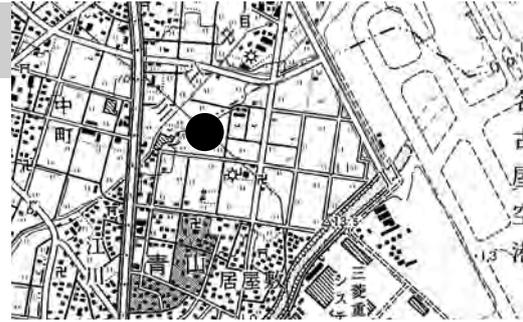
所在地 西春日井郡豊山町大字青山字金剛地内  
(北緯35度15分42秒 東経136度54分39秒)

調査理由 愛知県基幹的広域防災拠点事業(調整池)

調査期間 令和6年4月～令和6年7月

調査面積 5,047㎡

担当者 鈴木正貴・酒井俊彦・梶田真由



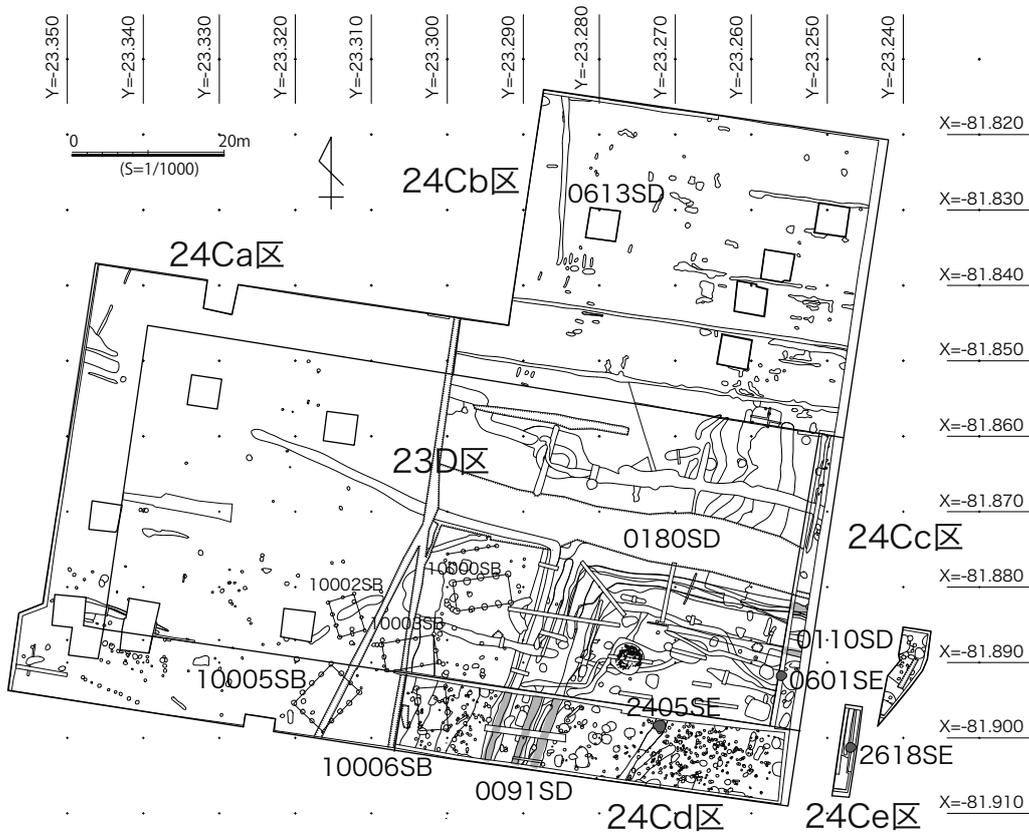
調査地点(1/2.5万「小牧」)

**調査の経過** 調査は、愛知県防災安全局による愛知県基幹的広域防災拠点事業(調整池)に伴う事前調査として、愛知県民文化局より委託を受け、令和6年4月～7月まで実施した。調査区は神明公園から西へ約400mの位置にある。調査面積は5,047㎡で、調整池地点をCa区、Cb区、Cc区、Cd区、Ce区に、南に伸びるボックスカルバート地点をDa区、Db区、Dc区、Dd区、De区、De区に区分した。

**立地と環境** 青山神明遺跡は、西春日井郡豊山町北部に所在し、小牧市から続く低位段丘上に立地する。調査区の北西約150mに中江川が流れており、標高は約10mを測る。

**調査の概要** C区は昨年度調査した23D区の外周部に相当し、Cb区、Cc区、Cd区で弥生時代から江戸時代24C区

時代の遺構が多く見つかっており、これらは4時期に大別される。  
弥生時代の遺構には土坑1580SKがあり、弥生土器壺が破損した状態で出土した。  
古墳時代から平安時代の遺構には掘立柱建物跡や竪穴建物跡などがある。1030SKは古



1面主要遺構図(1:1000)

墳時代の土坑墓と思われ、須恵器杯蓋や土師器甕などが出土した。掘立柱建物はCa区から、Cd区と23D区にかけて側柱建物跡が5棟検出され、竪穴建物はCb区南半から23D区北部にかけて10棟前後が発見された。竪穴建物の残存状況は不良で炉跡は不明である。

**中世** 鎌倉時代から室町時代の遺構はCb区、Cc区、Cd区で掘立柱建物跡、素掘り井戸8基、円形周溝遺構5基、区画溝、土坑などが発見された。Cc区、Cd区では23D区から伸びる区画溝群が継続して検出され、この溝群の北側と南側に多量の柱穴があり、掘立柱建物が繰り返し建てられたものと推測される。井戸は全て素掘り井戸で、円形周溝遺構は内側に地山起源の円礫が散在しており塚状の土盛があったとみられる。

**近世以降** 戦国時代以降の遺構としては、東西方向に走る大溝1580SDや江戸時代後期の溝0163SDなどがある程度で、戦国時代には集落ではなくなり耕地化したと思われる。（鈴木正貴）



Cb区2面遺構空撮（東から）



Ca区10005SB（北西から）



Cb区2面主要遺構図（1:500）

**24D区** 調査範囲は豊山町給食センター西側の南北に走る道路中央部である。幅約3m、南北長約200mの調査範囲に南よりDa区からDf区の6調査区を設定して調査を行った。Da区は浅い谷地形となりDb区から北はやや高い微高地となり北に向かって基盤が緩やかに高くなる。またDe区北端からDf区の南半に狭い範囲の浅い谷状低地があり、Df区北半は微高地となる。

Da区は遺構は検出されなかった。中央部分の谷地形最低部を中心に低湿地の堆積層が確認された。Db区は微高地の末端部分にあたり、時期不明の幅約3mの浅い東西方向溝と数基の小土坑を検出した。Dc区は中世の東西方向の溝3条、土坑十数基が検出された。Dd区は中世遺構が比較的多く検出された。直径2m程度深さ約50cmの大形の土坑3基、小土坑数十基、溝数条が確認された。大形土坑は井戸的な機能を持つ可能性がある。De区は中世の小土坑と井戸1基が検出された。北端部分から基盤面が下がり、やや低い谷地形となる。Df区南半は浅い谷地形で基盤層が湿地性の堆積層となる。遺構は時期不明の土坑1基が検出された。Df区北半は微高地となる。中世の溝数条と土坑数基が確認された。

24D区ではDc区からDe区に中世の遺構が集中する。掘立柱建物およびDe区に井戸1基とDd区に井戸の可能性のある大形土坑が確認されるなど、微高地上に中世の集落が展開すると考えられる。  
(酒井俊彦)



24Dc区完掘状況（北より）



24Dd区完掘状況（北より）



24De区完掘状況（南より）



24Df区完掘状況（南より）

あおやましんめい

## 青山神明遺跡 (本発掘調査B)

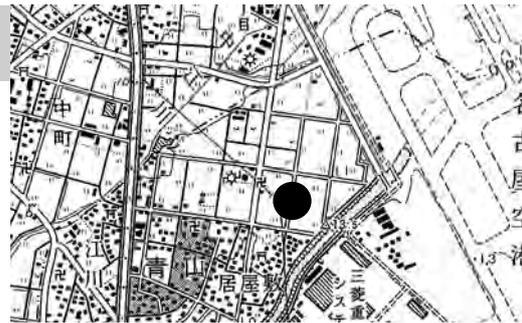
**所在地** 西春日井郡豊山町青山神明地内  
(北緯35度15分35秒 東経136度54分49秒)

**調査理由** 愛知県基幹的広域防災拠点事業(消防学校)

**調査期間** 令和6年12月～令和7年2月

**調査面積** 3,310㎡

**担当者** 鈴木正貴・酒井俊彦・梶田真由



調査地点(1/2.5万「小牧」)

**調査の経過** 調査は、愛知県防災安全局による愛知県基幹的広域防災拠点事業(消防学校)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年12月～令和7年2月まで実施した。調査区は神明公園の南西部に位置している。調査面積は、3,310㎡で西側からGa区、Gb区、Fa区、Fb区と区分した。

**立地と環境** 青山神明遺跡は、西春日井郡豊山町の北部に位置しており、小牧市から続く低位段丘上に立地する。本遺跡の南東側には大山川、南西側には中江川があり、挟まれている。標高は約10mである。

**調査の概要** Fa区では、弥生時代後期の方形周溝墓や古代・中世の井戸、掘立柱建物などが見つかった。  
**24Fa区**

方形周溝墓(601SZ)は南・東・西の3か所でコーナー部分を確認しており、このうち南側と西側では溝が途切れている。溝の内側の規模は一辺が約12.5mを測る。しかし、埋土上層からは礫群や須恵器杯蓋が出土しているため、今後詳しい時期の検討が必要となる。埋土の下層からは弥生時代中期～後期にかけての弥生土器甕が出土している。

一方、調査区南西側では602SZが見つかり、西のコーナー部分の一部のみ確認されている。遺構の深さはおよそ10cmと浅く、溝の内側の規模は一辺が約11mと推測される。周溝の最下層から弥生土器壺の口縁部が見つまっている。おそらく、これらの方形周溝墓は弥生時代後期のものと推測される。

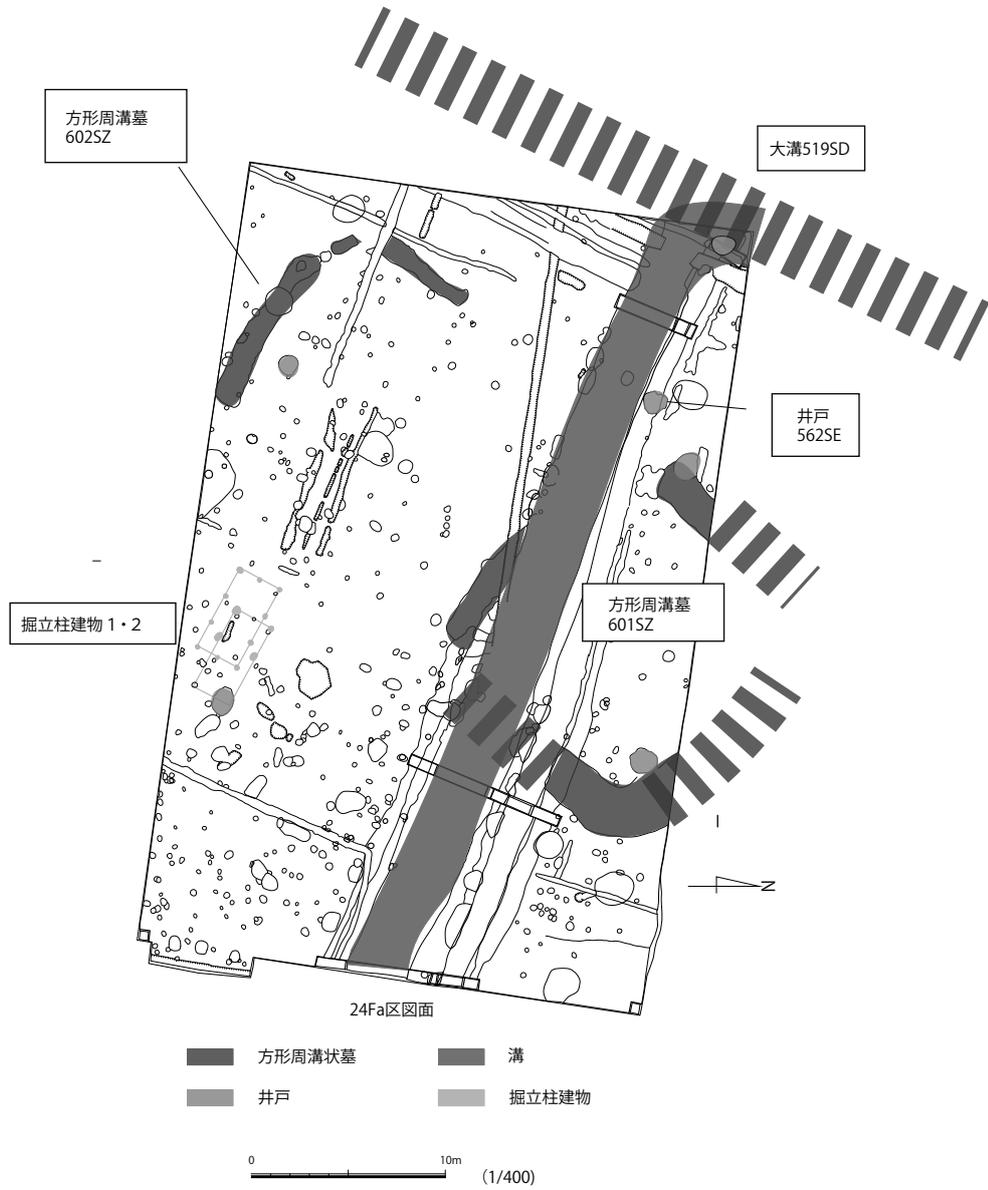
古代の遺構としては、平安時代の井戸(0562SE)が1基見つまっている。深さは現在の地表から約1mで、江戸時代の大溝で一部が削られている。中世は、掘立柱建物が2棟と井戸が5基確認されている。掘立柱建物の大きさは東西約4.5m×南北約3.5mで同じ場所で建て替えられている。遺物は尾張型山茶碗、古瀬戸の鉢の底部が見つまっている。

江戸時代の大溝は、東西方向に伸びており調査区の北西隅でGb区の大溝とつながり丁字になることが明らかとなった。青山神明遺跡24A区で確認された溝とつながる可能性がある。

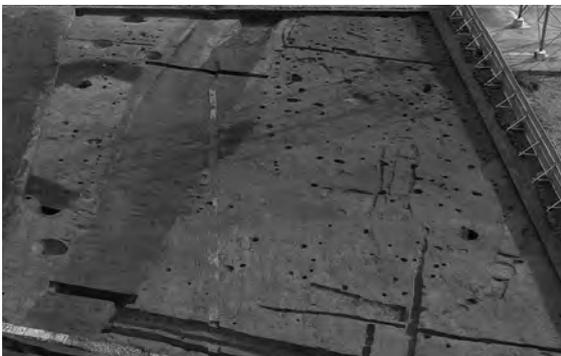
**24Fb区** Fb区は、Fa区よりも地形が下がっており、主に自然流路または湿地状の黒色土の堆積、土坑が多数確認されている。

黒色の粘土層から方形土坑の下層部分が見つっており、完形の山茶碗や小皿が伴うことから土坑墓の可能性はある。遺物は、流路、湿地状の堆積から灰釉陶器や山茶碗が出土している。

**まとめ** 今回の調査では、古代以前の段階で方形周溝墓が作られており、中世は、西側が集落、東側に土坑墓が展開していることが明らかとなった。(鈴木正貴・梶田真由)



24Fa 区 1 面目完掘状況 空撮近景 (西から)



24Fa 区 1 面目完掘状況 空撮近景 (西から)



24Fa 区 601SZ 完掘状況 (北西から)

24G区 調査区は大山川北側の微高地の高位部分にあたり、西側は谷地形と推定される。調査区西部は水田により基盤層が深さ0.6m程度階段状に削られており、谷地形の斜面を水平に削って造成されたと考えられる。

主な遺構・遺物は中世と近世である。中世の遺構は掘立柱建物1棟、井戸2基、土坑墓1基などが検出された。掘立柱建物は西部やや北寄り確認された。2間×3間で長軸を東西方向にとる。柱穴は径0.5m、深さ0.6m程度である。柱の痕跡が認められ、根固めが認められる。井戸は北西部で検出された。1基は長径1.8m、深さ0.9mを測る。昇降するための傾斜部と足場の平場が作り出されている。土坑墓は北西部で検出され、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。扁平な円礫と陶器片が2点出土した。また、土坑墓の可能性のある平面方形で底部が平な土坑が北東部で検出されている。近世の遺構として19世紀代の東西方向溝3条が調査区南辺で確認された。近世末の陶磁器類が出土した。

中世の掘立柱建物は周囲に集落の建物遺構がなく、独立したものと考えられる。また、井戸は特殊な形態であり、近辺に土坑墓が存在することから、調査区が中世の時期に特殊な区域であった可能性がある。水田は近世末の溝群より新しい時期であり、基盤面を深く削って造成されていることから近代以降の時期で近年の圃場整備まで存続したものと推定される。

(酒井俊彦)



Ga区完掘状況(真上)



掘立柱建物(東より)



井戸 1019SE (西より)



土坑墓 1010ST (東より)

あおやましんめい あおやまこんごう  
**青山神明遺跡・青山金剛遺跡(本発掘調査B)**

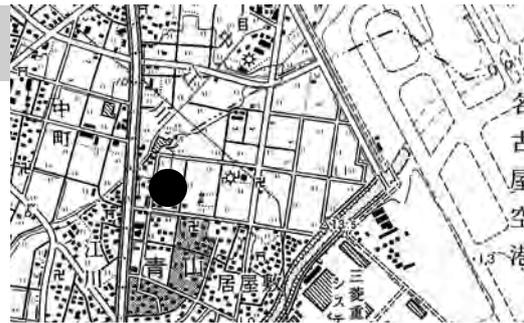
**所在地** 西春日井郡豊山町大字青山字金剛地内  
 (北緯35度15分38秒 東経136度54分31秒)

**調査理由** 愛知県基幹的広域防災拠点事業(代替地)

**調査期間** 令和6年9月～令和6年12月

**調査面積** 2,642㎡

**担当者** 鈴木正貴・酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「小牧」)

**調査の経過** 調査は、愛知県防災安全局による愛知県基幹的広域防災拠点事業(代替地)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年9月～12月まで発掘調査を実施した。青山金剛遺跡は豊山町給食センターの北西に位置しており、調査面積は655㎡で、A区とB区に区分した。青山神明遺跡は豊山町給食センターの西に位置しており、調査面積は1,987㎡で、M区とN区に区分した。

**青山金剛遺跡** 青山金剛遺跡は、西春日井郡豊山町北端部にあり、木曾川扇状地の扇端部にあたり小牧市から続く低位段丘上に立地する。北西に中江川が流れており、標高は約10mを測る。

**調査の概要** 調査の結果、奈良時代から平安時代の竪穴建物と鎌倉時代から室町時代の溝や掘立柱建物などの遺構が検出された。

奈良時代から平安時代の竪穴建物は全部で15棟あり、一辺が3.0mから4.5mの小型のものが多く、床面はほとんど残存していない状況であり、火処遺構は確認できなかった。土師器甕、須恵器、灰釉陶器の小片が出土した。鎌倉時代から室町時代の遺構としては、溝7条、竪穴状遺構4基、柱穴などがある。溝は12世紀から13世紀前半(0024SD)と13世紀から14世紀(0001SD～0003SD・0019SD)と15世紀代(0026SD)3期に区分される。竪穴状遺構は播鉢状に中央が下がるもの(0686SI)があり、0929SIでは白色粘土塊が出土した。柱穴は夥しい数が確認されており、少なくとも20棟以上の掘立柱建物が存在したと推定される。なお、調査範囲内では井戸は確認されていない。

**まとめ** 青山金剛遺跡は、愛知県文化財マップによれば、青山神明遺跡とは別の遺跡として認識されているが、北東側の青山神明遺跡(調整池)の調査結果と合わせて考えると、古代・中世の集落遺跡としては関連するものと思われる。

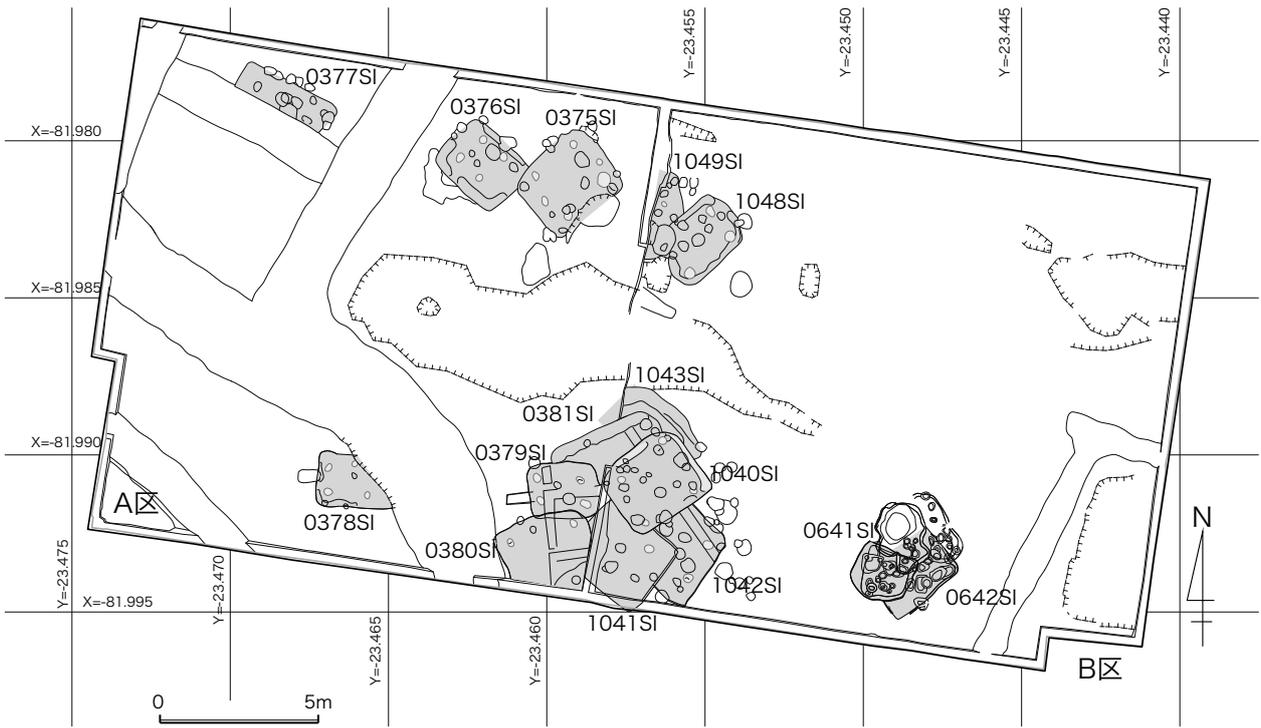
(鈴木正貴)



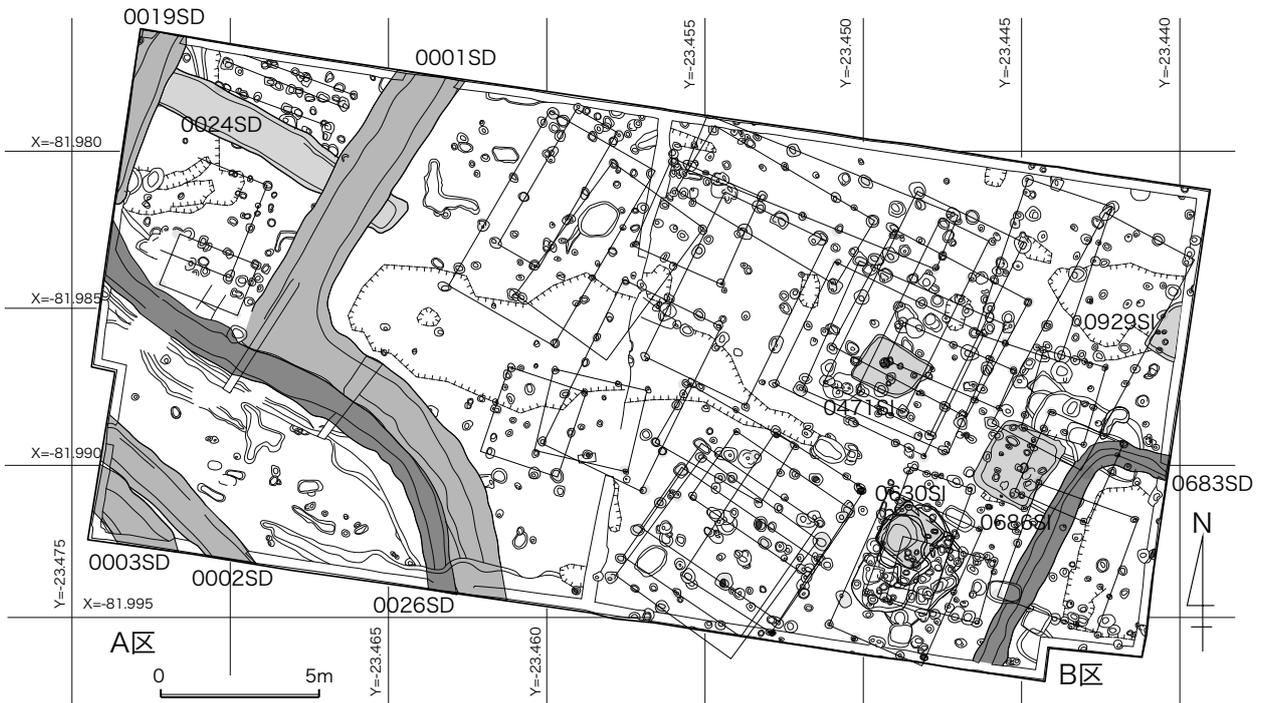
A区1面遺構全体(北西から)



B区南西部竪穴建物群(北東から)



青山金剛遺跡2面遺構図(1:200)



青山金剛遺跡1面遺構図(1:200)

**青山神明遺跡** 調査区は遺跡の南西部に位置する。調査区の西側は道路、南側は民家と24H区、北側は耕作地を挟んで青山金剛遺跡24A・B区が位置する。東側は24N区である。調査区の地形は東より続く微高地の高位部分で、南側は谷地形、西側もやや低い谷地形となる。北は青山金剛遺跡が立地する微高地である。

#### 24M区

調査によって確認された遺構遺物は主に平安時代と中世の時期に属するものである。平安時代の遺構としては井戸1基と溝数条が確認された。井戸は調査区中央で検出され、径1.1m、深さ0.6mを測る。調査区基盤層の明黄褐色シルト層内で掘り込みは止まり、湧水層である砂層や礫層には達していない。出土遺物は灰釉陶器椀、土師器甕が出土している。溝は調査区南半で東西方向にやや湾曲して走る溝4条が確認され、灰釉陶器が少量出土している。同時代の遺物として調査区全体で少量の須恵器片が出土している。

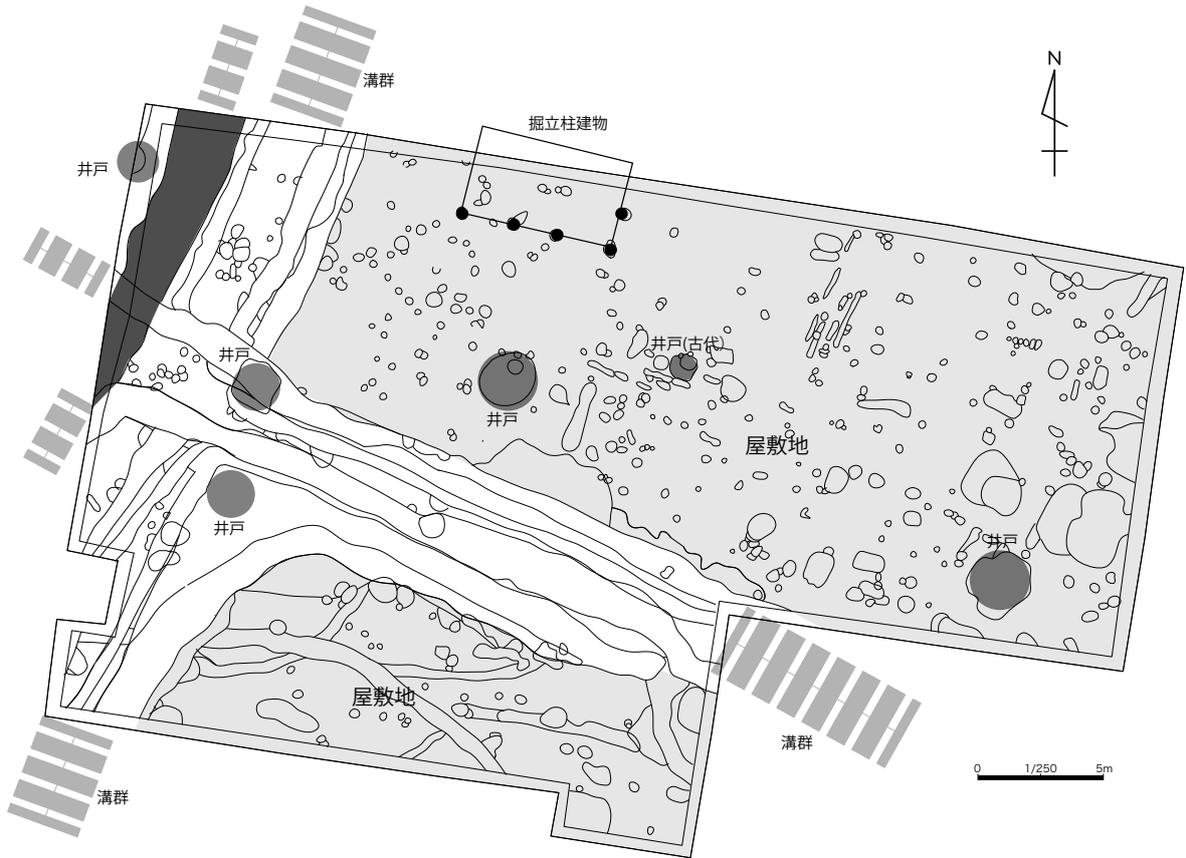
中世の遺構としては掘立柱建物の柱穴である小土坑が百基以上、溝十数条、井戸5基が確認された。調査区中央部にやや南東-北西に軸が傾く東西溝群が走り、調査区西部で南・北方向にほぼ直角に曲がる。東西溝は消失したものも含めて7条である。南北方向の溝は北方向に3条、南方向には5条が走る。これらは15世紀代の時期である。また、調査区北西隅で南北方向の溝群に並行して幅約2.5m、深さ0.6mの箱堀状の溝が確認されている。溝群より古く、北に位置する金剛遺跡に関連する遺構である。中央東西に走り南と北に屈曲する溝群は中世屋敷地を区画するものであり、北と南に二区画が想定される。柱穴と考えられる小土坑が多数検出され掘立柱建物1棟が確認された。井戸は5基が検出された。1基は南部系山茶碗5型式の時期で、溝群と切り合い関係がある2基は溝群よりやや古い時期である。このうち1基は平面が方形の形状である。調査区東部で検出された井戸は上部を傾斜させてロート状に掘る。中心部に径0.6～0.7mの堅穴を礫層下の砂層まで掘り下げ、深さは2.2mを測る。これ以外の中世井戸は調査区基盤面下の礫層上部の硬い砂層まで達している。溝群から15世紀代の山茶碗、古瀬戸陶器、石製品、鉄滓が出土している。

#### 24N区

調査区は24M区の東側に位置し、南側は24H区、東側は24D区となる。調査区南東は谷地形となり、北から西方向は調査区よりやや高い微高地である。調査区は谷地形以外の微高地が圃場整備によって数十cm削平され、深い部分でM区に比較して基盤面が約50cm下がる。このため微高地部分の遺構は少なく、井戸などの比較的深い掘り込みの遺構が遺存する。

確認された遺構遺物は平安時代と中世である。平安時代の遺構としては井戸2基が確認され、灰釉陶器、土師器などが出土した。中世の遺構として主に溝と井戸が検出された。調査区南西隅で24M区の連なる可能性がある溝2条が確認された。溝は北西方向から南に屈曲して24H区に繋がる。井戸は7基検出され、時期的には中世初期と15世紀代の2時期が確認された。中世初期の井戸より第5型式の山茶碗、15世紀代の井戸からは埋置された古瀬戸陶器が出土した。平安時代と中世の井戸は南東の谷地形に沿う微高地縁辺で検出された。

(酒井俊彦)



青山神明遺跡 24M区遺構図 (1/250)



24M区調査区全景 (真上)



24N区全景 (西より)



24N区古代井戸 0550SE 遺物出土状況



24N区中世井戸 0561SE 遺物出土状況

よせしま  
寄島遺跡(本発掘調査B)

**所在地** 安城市姫小川町地内  
(北緯34度54分44秒 東経137度05分46秒)

**調査理由** 中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)

**調査期間** 令和6年7月～10月

**調査面積** 618㎡

**担当者** 堀木真美子・河嶋優輝



調査地点(1/2.5万「安城」)

**調査の経過** 調査は、愛知県建設局知立建設事務所河川整備課による中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。当遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度が第8次の調査となる。今年度の調査区は遺跡北端部の市道部分にあたり、北は姫下遺跡2022年度調査区と接し、南は寄島遺跡2023年度調査区と接する。今年度は調査区を北から24A・24Bの2区に分割して調査を実施し、調査面積は計618㎡である。

**立地と環境** 遺跡は、碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、遺跡群の南群に位置する。

**調査の概要** 調査では、市道整備時の整地土および旧耕作土の下層に、遺物を含まない時期不明の流路跡が複数確認された。これらが基盤層まで深く掘り込まれているため、調査面積の半分ほどが削平を受けている。

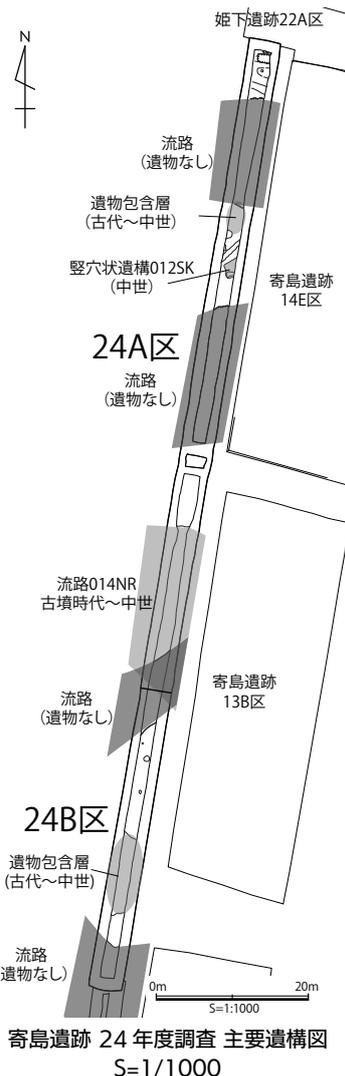
削平を免れた遺構には、古墳時代から中世の遺物を含む流路跡が1条、中世の遺物を含む竪穴状土坑が1基ある。そのほか、古代～中世の遺物包含層が2箇所確認された。

**旧流路** 旧流路014NRは今年度調査区の中央部で検出された。寄島遺跡13B区で確認されたものと連続しており、出土遺物は、古墳時代前期の土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗などがある。出土遺物の時期幅が広いと、単一の流路ではなく、複数期のもものが重なっているものと考えられる。

**竪穴状遺構** 竪穴状遺構012SKからは、土師器小型壺1点のほか、山茶碗の破片が複数点出土した。柱穴や周溝等の施設は確認できない。

**遺物包含層** 調査区内の2箇所で大粒砂質土を中心とした遺物包含層が確認された。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、伊勢型鍋のほか、中世後半に属する羽釜が出土している。

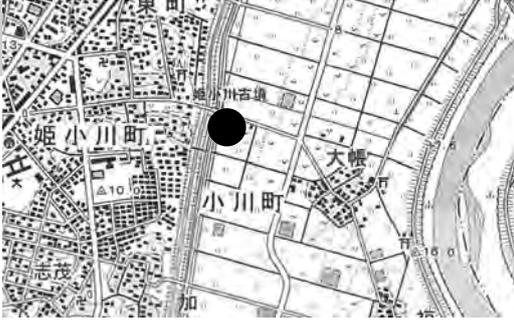
**まとめ** 今年度調査では、時期により場所を変える複数の流路跡が確認されており、包含層等は確認できるものの、居住などが行われる場所ではなかったものと思われる。(河嶋優輝)



寄島遺跡 24年度調査 主要遺構図  
S=1/1000

ひめした  
**姫下遺跡** (本発掘調査B)

**所在地** 安城市姫小川町・東町・小川町地内  
 (北緯34度54分52秒 東経137度05分48秒)  
**調査理由** 中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)  
**調査期間** 令和6年10月  
**調査面積** 187㎡  
**担当者** 堀木真美子・河嶋優輝



調査地点(1/2.5万「安城」)

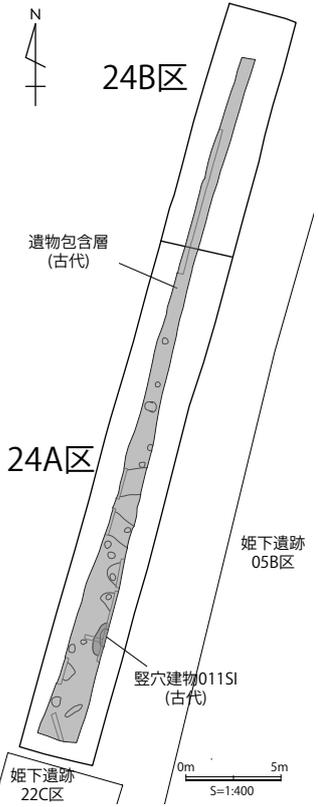
**調査の経過** 調査は、愛知県建設局知立建設事務所河川整備課による中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。当遺跡は平成17年度から調査を開始し、今年度が第7次の調査となる。今年度の調査区は市道部分にあたり、南は姫下遺跡2022年度調査区と接し、東にはやや間隔を開け姫下遺跡2005年度調査区が位置する。今年度は調査区を南から24A・24Bの2区に分割して調査を実施し、調査面積は計187㎡である。

**立地と環境** 遺跡は、碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、遺跡群の南群に位置する。東側の05B区では竪穴建物跡群および旧流路が確認され、今年度調査範囲は旧流路の北側にあたる。

**調査の概要** 調査では、おおよそ全面にわたって土師器、須恵器、灰釉陶器が含まれる遺物包含層が検出され、その下層では土坑群のほか、溝2条、竪穴建物1棟が確認された。各遺構からの出土遺物は乏しいものの、層序から古代以前の遺構と考えられる。

**竪穴建物跡** 竪穴建物011SIは、南北長約1.8m、東西長0.6m以上の隅丸方形プランを持つ。幅約0.2~0.5mの周溝を持ち、柱穴は確認できない。遺構埋土から土師器片が出土しており、古墳時代から古代にかけての遺構と推定される。

**まとめ** 今年度調査区については、東側の05B区で展開していた竪穴建物群が確認できなかった。包含層からの出土遺物も乏しく、集落の縁辺部としての性格が想定される。(河嶋優輝)



姫下遺跡 24年度調査 主要遺構図 S=1/400



姫下遺跡 24A区全景(北より)



姫下遺跡 竪穴建物 011SI 完掘状況(西より)

なかはざま  
中狭間遺跡(本発掘調査B)

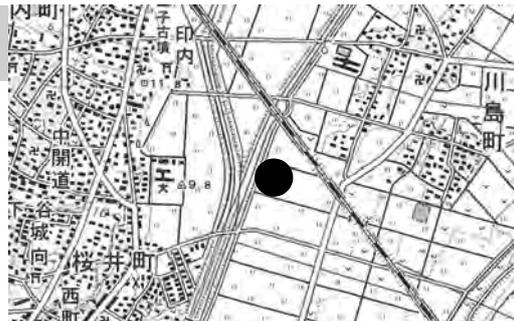
**所在地** 安城市桜井町・川中町地内  
(北緯34度55分25秒 東経137度06分00秒)

**調査理由** 中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)

**調査期間** 令和6年10月

**調査面積** 56㎡

**担当者** 堀木真美子・河嶋優輝



調査地点(1/2.5万「安城」)

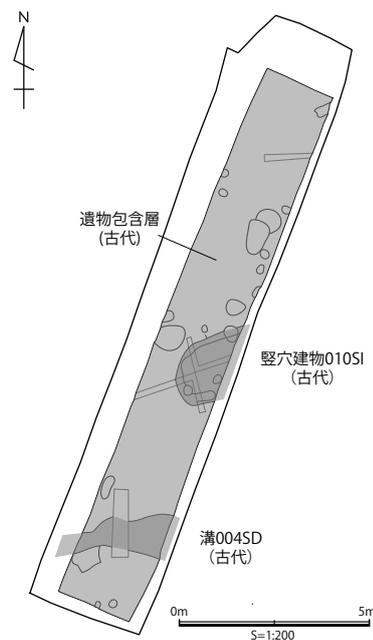
**調査の経過** 調査は、愛知県建設局知立建設事務所河川整備課による中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。当遺跡は令和2年度から調査を開始し、今年度が第4次の調査となる。東にはやや間隔を開けて中狭間遺跡2022年度調査区が位置する。今年度調査面積は56㎡である。

**立地と環境** 遺跡は、碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、遺跡群の北群に位置する。当遺跡内では、今年度調査対象地の南方で方形周溝墓および土器棺墓から構成される弥生時代中期～後期の墓域が確認されている。

**調査の概要** 調査では、おおよそ全面にわたって土師器、須恵器、灰釉陶器が含まれる遺物包含層が検出され、その下層では土坑群のほか、溝1条、竪穴建物跡1棟が確認された。溝からは須恵器甕類が出土した。

**竪穴建物跡** 竪穴建物010SIは、短軸長約1.6m、長軸長1.5m以上の楕円形プランを持つ。周溝は幅約0.2～0.3mで、南辺の一部で途切れる。柱穴は確認できない。遺構埋土から土師器片が出土しており、古墳時代から古代にかけての遺構と推定される。

**まとめ** 今年度調査区における、竪穴建物と溝がまばらに展開する様相は、南方に存在する弥生時代の墓域とは全く異なり、東側に位置する22E区と類似する。(河嶋優輝)



中狭間遺跡 24年度調査 主要遺構図  
S=1/200



中狭間遺跡 竪穴建物 010SI 完掘状況(南西より)



中狭間遺跡 溝 004SD 須恵器出土状況

のぞえ かやの  
野添遺跡・萱野遺跡 (本発掘調査B)

**所在地** 豊橋市石巻本町地内  
(北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒)

**調査理由** 道路改良工事(交付金)東三河環状線

**調査期間** 令和6年10月～12月

**調査面積** 1,228㎡

**担当者** 堀木真美子・田中 良



調査地点(1/2.5万「豊橋」)

**調査の経過** 調査は、愛知県建設局道路建設課東三河東建設事務所による東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県民文化局より委託を受け、実施した。本遺跡は平成25年・令和4年・令和5年度に調査が行われ、令和6年度は、野添遺跡の23区の西側375㎡と市道石巻本町188号線を挟んで西側の萱野遺跡853㎡の計1,228㎡を調査した。

**立地と環境** 遺跡は豊川左岸の河岸段丘縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は、河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたり、令和4年度以降の調査は高位の段丘上に立地する。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

**調査の概要** 野添遺跡では、23区から続く区画溝の西端と土坑墓(19SK)が検出され、屋敷地の規模やその構成が分かる貴重な事例となった。萱野遺跡では、17世紀～18世紀の区画溝と掘立柱建物(01SB・02SB)が調査区の南側で検出され、調査区の北側では16世紀の土坑墓(112SK)や14世紀の柱穴列(SA01)が検出された。

**野添遺跡** 今回の調査区からは、23区から続く区画溝の西端と屋敷地に伴う土坑墓(19SK)が検出された。これにより、前回の調査区(23区)と合わせて16世紀の屋敷地が推定できる調査事例となった。また、区画溝からは豊臣時代の大阪城で流通するものと同様の犬形土製品が出土し、豊橋市内では吉田城址に次いで2例目の事例となった。

**萱野遺跡** 萱野遺跡では、野添遺跡よりも新しい17世紀から18世紀の区画溝とそれに区画された掘立柱建物が2棟(01SB・02SB)、調査区の南側から検出された。掘立柱建物の柱穴には、人頭大の礫を1～2個伴い、直径60cmを超えるものが多く、大型の建物跡が建っていた可能性が想定される。区画溝からは、土師器や内耳鍋のほか、陶器や磁器なども出土しており、特に風炉や火鉢などの火具の出土が目立つ。

調査区の北側では、16世紀の土師器皿と渡来銭がそれぞれ5枚出土した土坑墓(112SK)や柱穴群が検出され、野添遺跡と同様の屋敷地が展開する可能性がある。さらに、14世紀まで遡る柱穴列(01SA)も検出された。

**まとめ** 今回の調査では、野添遺跡において16世紀の屋敷地を考える上で貴重な事例となったほか、萱野遺跡ではそれよりも新しい時期の屋敷地が展開することが分かった。また、萱野遺跡では14世紀の遺構の片鱗が確認できたこともあり、この地域に中世以降、場所を変えながらも連綿と人が住み続けていることが判明した。今後、出土遺物の検討を進めることにより、屋敷地の内容がより明らかになり、吉田城との関わりなども見えてくると考えられる。さらには、この地域の寺院との関連性もより明らかになっていくものと考えられる。

(田中 良)



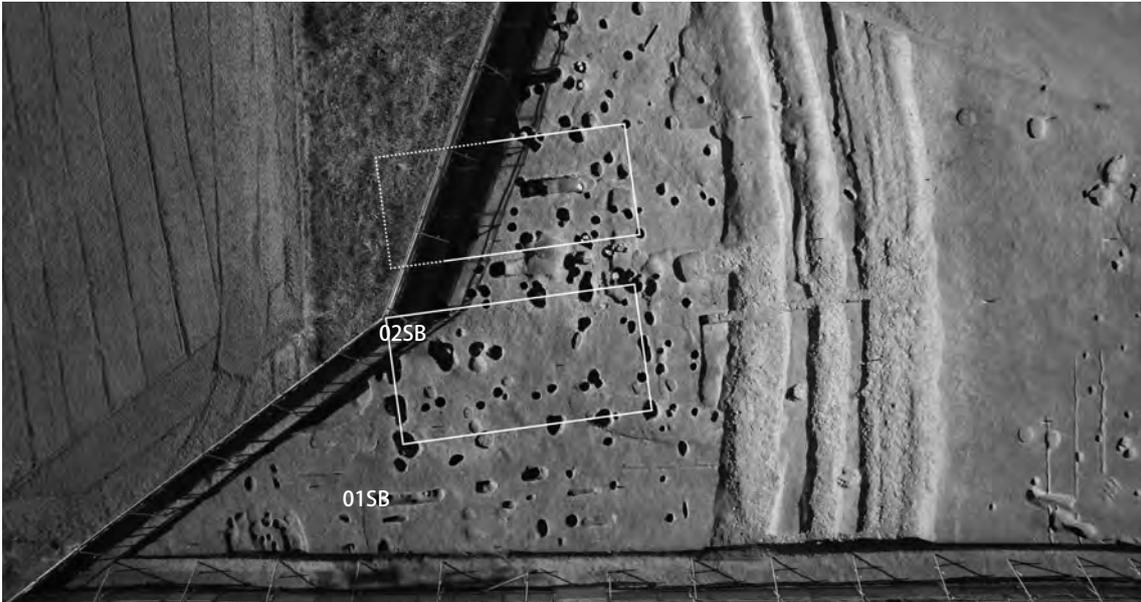
■ 区画溝(17世紀～18世紀)  
■ 区画溝(15世紀末～16世紀)

0 1:300 10m

野添遺跡・萱野遺跡遺構全体図(S=1/300)



野添遺跡 調査区全景(北から)



萱野遺跡 掘立柱建物跡 SB01・02(東から)



萱野遺跡 土坑墓 112SK 遺物出土状況(南東から)



萱野遺跡 01SBの柱穴土層断面(南東から)

なかむら  
中村遺跡(本発掘調査A)

所在地 北設楽郡設楽町八橋字道上地内  
(北緯35度7分41秒 東経137度35分16秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和6年7月

調査面積 22㎡

担当者 堀木真美子・田中 良



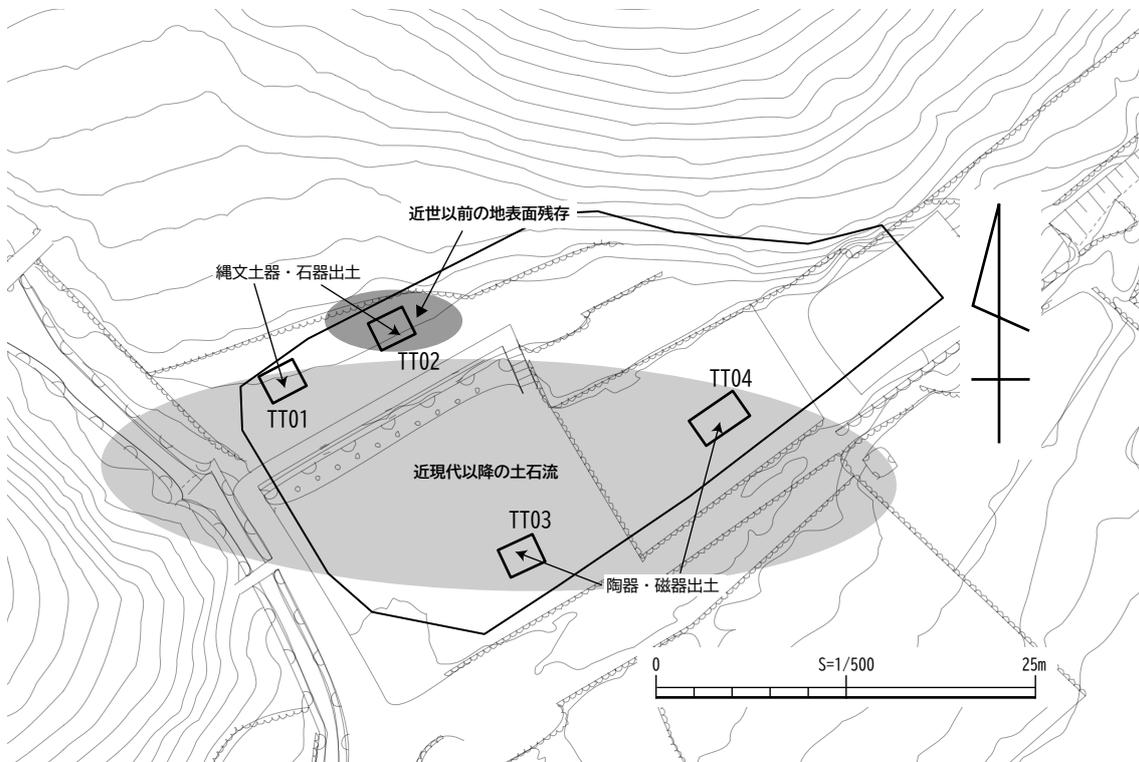
調査地点(1/2.5万「田口」)

**調査の経過** 調査は国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査は遺跡の範囲を確認するために、遺跡の北東側の緩斜面地にTT01～TT04の4箇所のトレンチを設定し、実施した。トレンチは2m×2.5m×3箇所、2m×3.5m×1箇所で総面積は22㎡である。

**立地と環境** 遺跡は、豊川支流の境川上流右岸に所在する(設楽町八橋地区)。境川がつくる幅約150mの谷地形の北縁を北東から南西方向に伊那街道が延びており、その沿道に八橋地区の集落が展開する。街道は標高約449～452mにあり、遺跡はそれを境として北西側の斜面地(標高約457～472m)と南東側の平坦面(標高約445～452m)に立地する。

**調査の概要** 今回の調査では、現況の緩斜面地が土石流によって形成されていることが分かった。また、TT02では、縄文時代中期後半から後期の土器片や石器が出土し、あまり摩滅していないことから、この地点よりも山側に縄文時代の遺構が展開する可能性を確認できた。

(田中 良)



中村遺跡調査区配置図(S=1/500)

かみとがみ  
上戸神遺跡 (本発掘調査A)

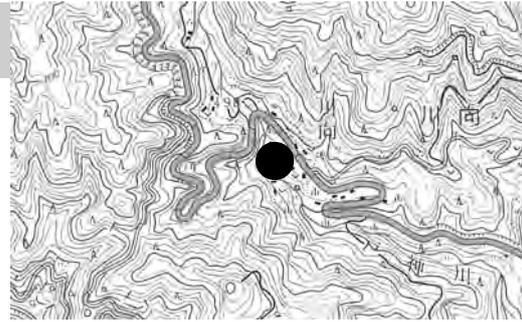
**所在地** 北設楽郡設楽町川向字上戸神地内  
(北緯35度06分49秒 東経137度33分25秒)

**調査理由** 設楽ダム

**調査期間** 令和6年7月

**調査面積** 132㎡

**担当者** 堀木真美子・田中 良



調査地点(1/2.5万「田口」)

**調査の経過** 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査は遺跡の範囲を確認するために、遺跡の西側を中心にTT01～TT12の12箇所のトレンチを設定した。トレンチは4m×7.25m×1箇所、3m×6m×1箇所、3.4m×5m×1箇所、1.5m×8m×1箇所、3m×3m×4箇所、1m×5m×4箇所で総面積は132㎡である。

**立地と環境** 遺跡は、東堂神社の正面にある平坦面を中心に戸神川左岸の河岸段丘上および南向き斜面に立地する。

**調査の概要** 今回の調査では、遺跡の旧地形と現地形が大きく異なることが判明した。TT04・TT05からは、炭化物を多く含む谷埋土と岩盤が地表から1.5m下で検出され、谷埋土中から石器や縄文土器の細片が出土した。

TT01～TT12の全てのトレンチからは、土石流堆積の痕跡が確認された。現況は緩斜面や平場となっているが、これは山側からの土石流によって形成されていることが分かった。元々の地形は谷状となっており、そこを近代以降に開墾し、段々畑などに利用していたことが分かった。

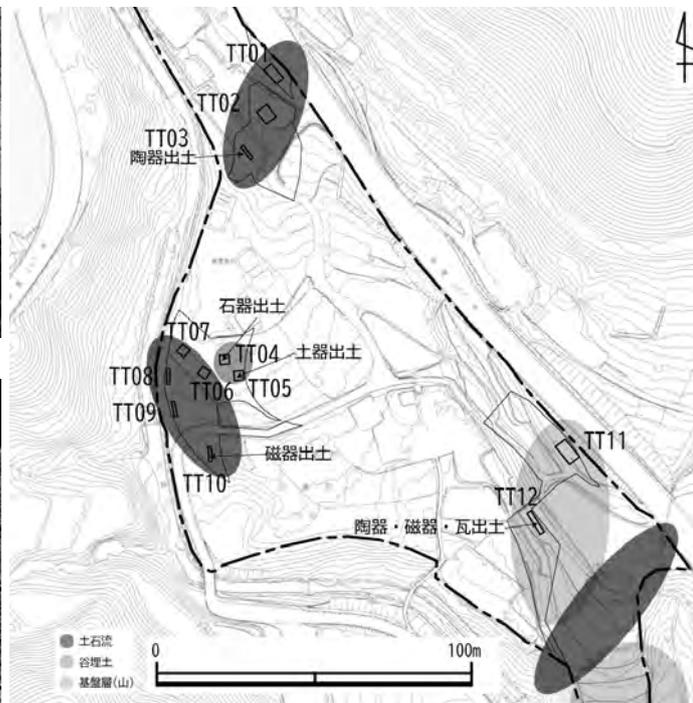
(田中 良)



TT05 東壁土層断面 西から



TT11 完掘状況 東から



上戸神遺跡調査区配置図

## ハラビ平遺跡<sup>だいら</sup> (本発掘調査A・B)

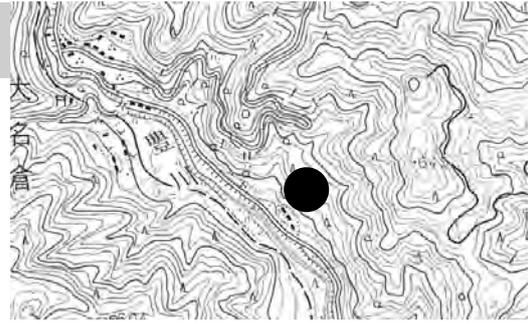
**所在地** 北設楽郡設楽町大名倉ハラビ平地内  
(北緯35度06分26秒 東経137度33分01秒)

**調査理由** 設楽ダム

**調査期間** 令和6年11月～令和7年1月

**調査面積** 857㎡

**担当者** 堀木真美子・河嶋優輝



調査地点 (1/2.5万「田口」)

**調査の経過** 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム事業に伴う事前調査として、愛知県民文化局より委託を受け、実施した。当遺跡では平成27年度および平成30年度に本発掘調査Aが行われており、その結果を受け、今年度の本発掘調査Bが実施された。今年度の本発掘調査Aの範囲は、本発掘調査Bの南側にあたり、遺跡範囲を確認する目的で、2m×1mのトレンチ(以下TT)1箇所、4m×1mのTT1箇所、2m×2mのTT7箇所の計9箇所を設定して実施した。調査面積は計34㎡である。本発掘調査Bは調査区を西から24A・24B・24Cの3区に分割して調査を実施し、調査面積は計823㎡である。

**立地と環境** 遺跡は豊川上流の左岸に所在し、北東から南西に向かって下る緩斜面に位置する。現状は植林による杉林である。当遺跡から豊川を上流に向かって500mほど遡った右岸には設楽町指定史跡の大名倉遺跡が所在し、下流方面に約400mほど離れた左岸側には令和2年度に本発掘調査Bを実施した胡桃窪遺跡が所在する。

**本発掘調査Aの概要** 本発掘調査Aの対象地内東側には2段に渡る棚田が残っており、各段には石垣が残る。棚田より西側は緩斜面となっている。

棚田部分では、上位の段に2m×1mのTT01、下位の段に4m×1mのTT02を設定した。それぞれ、厚さ0.2～0.4mの表土下に黒褐色土が堆積し、現地表面から1.5mほどで礫を多く含む黄褐色粘土質シルトの基盤層に到達する。基盤層までの間に遺物包含層は確認できず、遺構も検出されない。両トレンチとも谷地形の内部にあたるものと考えられる。

緩斜面部分では、2m×2mのTT7箇所を分散して設定した。層序はほぼ全てのトレンチで一致しており、厚さ0.2～0.4mの表土下に基盤層が広がる。基盤層の傾斜はほぼ現地形に沿う。基盤層上面で遺構はほとんど確認できず、異地性と思われる遺物が少量出土したのみである。

**本発掘調査Bの概要** 本発掘調査Bの対象地は本発掘調査Aの対象地の北側にあたる。東側には3段に渡る棚田が残り、西側は緩斜面となっている。検出された遺構の帰属時期は、縄文時代と古代の2時期がある。前者には竪穴建物1棟、石器・縄文土器を含む土坑数基が確認され、後者には底部に被熱痕の残る土坑1基、土師器甕・灰釉陶器を含む土坑数基がある。

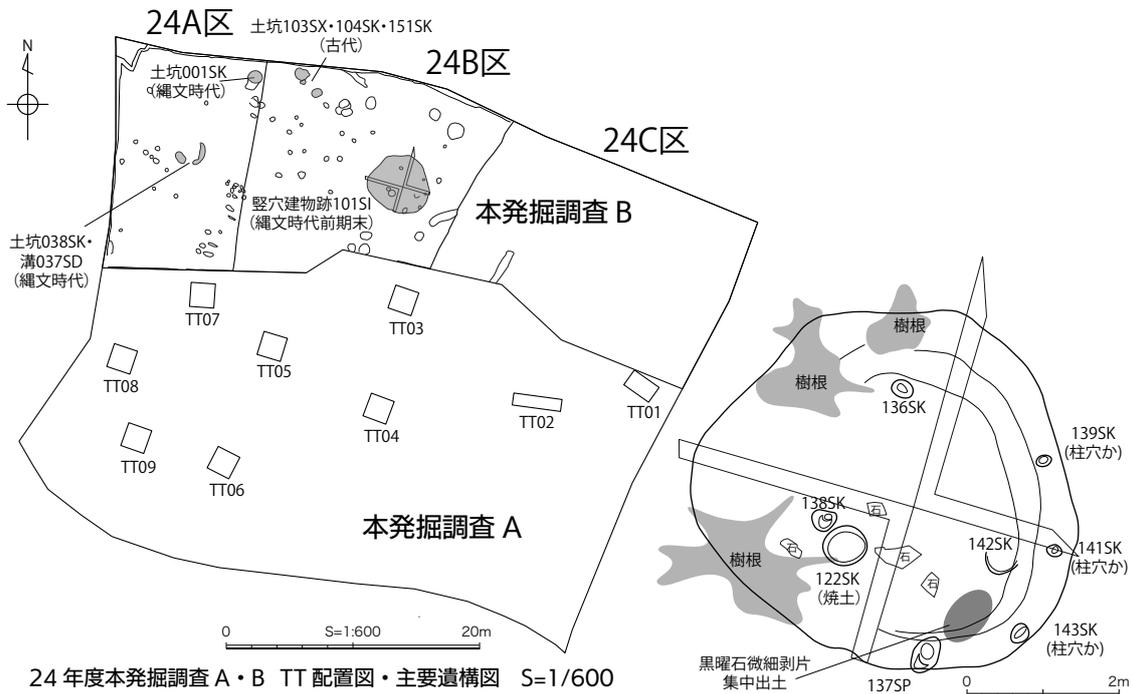
**竪穴建物101SI** 竪穴建物101SIは24B区で検出された。平面規模は短軸約4.8m、長軸約5.1mで、プランは樹根による攪乱もあり不整形となっている。斜面地のため、掘り方は北東側が深く、南西側が浅くなっており、底面は水平に近い。基盤層は角礫を多く含む居住に適さないためか、礫の少ない土を底部及び壁面に貼って床面とする。床面はやや硬化している。

明確な炉跡は存在しないが、埋土に焼土を含む土坑122SKが床面で検出された。ただし被熱面は確認できなかった。竪穴建物外縁に並ぶ小土坑群に柱穴の可能性はある。

埋土・貼床土からの出土遺物は縄文土器、磨石・敲石類、打製石斧、石鏃のほか、黒曜石の微細剥片が100点以上確認されている。縄文土器の帰属時期は前期末が中心であるが、一部に早期後半や中期のものが含まれる。

**被熱土坑** 103SXは埋土に焼土が含まれる不整形の土坑で、断面形は浅い皿状をなす。基盤層を103SX掘り抜いた底面には明瞭な被熱痕が残る。出土遺物はないものの、隣接する104SKで灰釉陶器、近接する151SKで清郷型甕などが出土しており、古代に属する可能性がある。

**まとめ** 今年度調査で検出された縄文時代前期末および古代の遺構は、近接する胡桃窪遺跡でも確認されている。胡桃窪遺跡と異なり縄文時代中期の遺構は確認できなかったが、中世から遺構が途絶える点は両遺跡で一致しており、大名倉地区の豊川左岸の遺跡として、ある程度盛衰が連動していたものと考えられる。(河嶋優輝)



24B 区完掘状況空撮 (上が北)



竪穴建物 101SI 石鏃出土状況



竪穴建物 101SI 床面検出状況 (南西より)

